
浮き夢のまどろみ

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮き夢のまどろみ

【Nコード】

N2557R

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

絶望した少年と光を失った少年は出会う。互いに、失ったものは唯一つの存在だった。運命に翻弄されるがまま、二人は出会い、戦いの中へ身を投じることとなる。——同じだと思った。自分と同じ闇を持っていると。過去と現在の狭間に立つ二人は、光を求めて互いに求める。けれど、真実は隠されたまま、何も終わってなんかいなかった。学園能力者バトルここに開幕。——すべての終焉に向けて。

ぶろろーぐ

浮き夢のまどろみ

【ぶろろーぐ】

初めて君と話した時、狂喜した。

いつも通りの一日、いつも通りの行動をして、いつも通りの一日を終えるはずだった。

でも違った。日常の中でありながら、いつもと違った。たった一つの、些細な出会い。

月に一度、わざわざ遠回りをして自宅へと帰る。どうせ早く帰ったところで待つものはいない。何の趣味もなく人生に面白みを感じないまま、いつも無関心に脚を進める。けれど、月に一度のその日だけは、足を止めてしまう。川の水面に浮かぶ儚き月を眺める。

満月は古来、人を惑わすと言われている。それに囚われているのだろう、精神が乱れやすく思える。水底を見通すように、水面の朧月を覗き込む。

それは水面であって月でない。決して本物でない、偽物の、紛い物。掴めず、得体の知れない存在。

満月が夜空に輝く時。強い風が桜色を大きく揺らし、幻想的な光景を途切れさせた。波状に広がる輪は、写しこむ、銀色。——魔が満ちる夜の蠱惑的な月色。

生き物は闇に息を潜め眠りに付く時間帯。静寂と沈黙、清廉な水が光に照らされキラキラと反射する。その中であつた銀色は……そこにはいたのは、人の域を越えた美しい生き物。

マモノ。

銀色は桜の木が呼んだ、唯一つの奇跡だと思った。

闇と静寂

【No.1】

外の明るい光をカーテンで区切り、適度に暗くなった室内。息を潜めるような静寂な部屋に二人はいた。理事長室、それがこの部屋の名だ。

一人は理事長という名の、形ばかりの部屋の主。もう一人は本質的な、部屋の主。

広々とした部屋の中央にある格式ばかり高い机の前に座す者と来客用の高級ソファを通して奥、部屋との境界線となる唯一の扉へと背を預ける者。後者は小柄で、しかし子供というよりは青年という歳に達していた。前者は若々しくも大人として風格のある程度備わった“理事長”である。

男は青年に対し、言葉を期待していた。寡黙な青年は瞳を合わせることなく、静寂を纏い、言葉を紡ぐ様子はない。どちらも忙しい身のために沈黙という時間は本来、削られて然るべきだが、それだけに現在の会話の内容が重いと知らしめていた。

理事長、という立場から言っても広い机に倒壊寸前と積み重ねられた書類の処理より青年の言葉を聞くほうが重要だった。

「——こいつは、俺と同じだ」

青年は闇の中に一言、漏らす。

「表では生きられない」

闇の言葉は室内の闇に滲みこむように消えたが男の耳には印象強く残った。

「二週間——、一週間で保護しろ。問題を起こす前に、困え。でなければ、埋もれる」

早々に潰される、と続いた言葉に男は青年の表情を見た。

俯いた顔は薄暗い部屋において殆ど影だ。その内心を推し量ることは出来ない。もどが無表情の多い性格だと知っているが故に、青

年の僅かに沈んだ声に、揺らぐ感情に男は気付いた。

青年にとつてもその判断は辛いはずだった。なまじ、件の人物が彼と関りのある人物の血縁であるがために、傷は深まる。

未だ癒えてはいないだろう、かつてのこと。青年の心を深く抉る事件だったのに、あれからまだ2年と経っていないのだ。それなのに再び関わる道を選ぶ。

「本当に、それでいいんだね？」

柔らかい声音で、最終的な確認を取る。本当は選択権など、元からなかった。それでも、彼にまで確認を取ったのは、再び、後悔することを恐れたからだ。

以前は何も知らなかった。最後の最後、全てが終わってから知らされた。だから、同じ事は繰り返したくないと思う。この学園の理事長として、生徒を預かる立場として、彼の血縁として、——何より、“朝日 旭”^{あさひ あきひ}という一個人として。

「コイツは幼い。運命に対して、無知だ。世界に翻弄されるままでは、苦しみが長引くだけだ。——頼む」

真剣な声音で、けれど視線は一度も混じることなく、彼は言った。自分に求めているのは、理事長という立場だけなのだと、わかる。個人的に頼ろうとしていない。

それでも、

「ならば私が言う事は何もない。沙羅、君の言うとおりでしょう」
肯定の意を返す。諦めていた。何も知らなかった、何も出来なかった自分に頼ってくれないことなど、初めから知っていたつもりだ。
「——頼む」

彼は目を瞑って、懇願に近く念を押した。断るつもりも、放任するつもりも無いのに、そこまでする。開いた瞳には一瞬、苦悩のよなものが浮んだが、それを判別する前にそれは無へと消えていた。冷えた瞳の色は感情までも凍らせている。

そうして、初動作もなく扉から背を離すと、すぐさま身を翻し部

屋から消えた。少しの間だけ入り込んだ光が彼の線の細い体を余計に儚く見せて、たった今下した決断が正しいものだったのかと再び疑問を浮上させる。

元から薄かった青年の気配は足音すら残さずに消えていった。けれど男の胸には幾つもの言葉が重く圧し掛かっている。

埃など舞うことの無い、清潔を保たれた部屋は静寂の中に未だ闇を残す。新しいつくりの、精々が十年も経っていない部屋の作りの中で重々しく、暗い闇だけが重厚に馴染んでいた。

一人が出て行く。それだけで空気は凍るように冷たくなる。沈殿する空気が凍てつくように男を突き刺していた。

「私は君の幸せを、何より願っているのに、——私は君に何ができるんだろっね？」

——自分が幸せにしてあげたいのに、その資格が自分にはない。

男にはその本当の名を呼ぶことさえ、許されてはいなかった。

ただ一人の人物は既にもう、二度と会えない彼岸へと行ってしまったというのに、青年はそれを過去に出来ず、誰のことをも拒絶していた。

「救えるのかな、この子は。君の光に、なってくれるのかな」

男は手にしていた資料を机に乱雑に置いた。写真に写る幼顔の青年は、男の恋焦がれる人物の心に残るただ一人の面影を強く残していた。

視線を外したいがために、男はカーテンを強く引いた。

強い昼の日差しが部屋になだれ込む。けれど、心の闇は払われてくれそうも無く、ただ溜息をついた。

「さ、仕事だ」

気分を盛り上げるように言葉に出してみるが、甲斐もなく、空しいだけだった。気分は低空のまま、仕事につく。けれど、心だけは儚く遠い存在へと向けられ続けていた。

想いは高く

気付くだろうか、自分に。

気付いてほしくない。でも気付かれない。近づきたい、近づけない。

気付かれた時点で全てが終わりだった。“自分”という存在が崩れそう、そんな境界線上に二人の関係性はある。だから、気付かれてしまえば、それは否定されるのではないかと、そんな不安ばかりが渦巻く。

数々の仮面を持つ己の、“本当の姿”を知ってもらいたい。そう思うのはただの我侫で、傲慢に他ならない。知られることで嫌われることになるのなら、騙したまま、偽ったままでもいい。そんなことさえ思う自分はなんと醜いのか。

“彼”は、自分の何かを変えてくれる。そんな予感がした。そしてそれは確実なことなのだろう。――変わらざるを得ない。それは決定的に、運命的に、必然。

なぜなら、彼はただ一人の、自分の光であり、自分もまた、彼の光となるだろうから。

道化な自分はどれほど滑稽だろうか――。

青年の自室があり暮らす寮。その密集地帯である居住エリアへと向かう道すがら、ふと立ちどまった。そのまま背後へと視線を逸らす。たった今、青年が歩いてきた道だった。

高い塔は理事長室を天上に、空へと伸びる職員棟と呼ばれる建物だ。その土地は広大、抱える生徒数もそれに相応するように多く、日本において最大規模の敷地を持つ。同時にここはある種の特殊性を秘めた、組織でもある。

“能力者”と呼ばれる進化した院類が現われるようになって直ぐ

に創設されたこの学校は朝日一族が代々守護する。そのため朝日学園——と呼ばれている。

青年は立ちどまったその場から再び動こうとして、もう一度だけ、視線を動かした。

正門へと向ける瞳。それは目前の景色を通り越し、見えない地にある桜の木を眺めていた。

満月の夜、風に吹かれて多くの花弁を根元付近と傍らにある川へと散らせて行く。その視界に紛れるように、廃墟を見せた。そして、青年のかつて愛した人物をも、そこに未だ存在するように魅せる。

（——幻想だ。本当はもう、どこにもない）

荒れた土地は既になく、栄光を誇った時代の欠片さえも撤去され、たはずだ。

頭を振って、その幻視から意識を逸らす。

青年には使命があった。前だけを見続けなければならないという、その強い意思が現在を型造る。それを忘れないために、過去を見つめているだけではないのだ、と前に歩き出した。

けれど、それは逃げであるというように、突きつけるようだった。影が己の後を追うように忍び寄っているのではないか——。その証拠というように、件の人物は、彼の過去に深く関る人物でもあり、そして青年を批判し、否定し、憎む可能性のある人物でもあった。

それが分かっている、その人物の入学を、理事長へと願ったのだ。

（陽汐 犀臥——お前は、力を望むだろうか）

願わくば、復讐をこの身へと——。

青年は弱い風の中、歌うように願う。

彼の思索

正門のインターホンが鳴る。

全身漆黒をまとう少年、陽汐ようせき 犀臥さいがはその巨大なる門を見上げていた。

合成音で迎えられた犀臥はけれど、そのみではなく、歓迎される。

新年度ということで学生は学年が上がる。それを犀臥に当てはめるならば高校一年生となる。そして、ここは高校だ。朝日学園という全寮制の、日本トップクラスの高校である。ならばその入学式は盛大に行われて然るべきだ。

だが、実際に正門を通りかかる姿というのは犀臥以外には見当たらない。時間は八時半を示し、式の始まる九時には何かがあつても調整が出来るだけの余裕がある。それでも人っ子一人いないのは、ここが中高エレベーター式であり、高校からの入学というのは特例以外編入を認めていないからだ。——そんな特例の一つとして、犀臥は高校一年にして編入を果たす。

犀臥はここで人を待っていた。寮の同室となる内部生が案内役として迎えに来る。

その数分間で犀臥の頭の中を占めていたのは、ただ、一つの美しい光景だった。自らがこれから生活することになる学校のことでもなく、両親を早くに亡くして己を育ててくれた兄の、ただ一人の家族の失踪という二年前の出来事のことでもなく、自身に関わる特殊な事情でもなく、——数日前に見た、美しい光景と、そこにいた美しい人物のみが思考を埋め尽くしていた。

銀の髪は月の光を受けて幻想的に輝き、長い睫毛に縁取られた瞳は夜を写し取ったかのような藍色。薔薇色の頬に可憐な唇。今にも儚く消えてしまいそうな遠くを見る視線。——女神のような美しさ

で佇むその人物は、けれど闇を抱えたような姿で光を求めていた。
直感する。——あんなにも光を纏う様な容姿で、けれど闇の中を
孤独に歩いてきたのだらう。ただ一人、傷つきながら。そして、光
を求め続ける。

そんな姿こそが、光だと、知らないままに。闇にとっては、己こ
そが光なのだと。

——悲しく、美しい人。

あの時を思い出すだけで身体が、胸が熱くなるようだった。

（再び、会えたらいいのに）

けれど、それはただ一度会っただけのことだ。偶々擦れ違ふ。そ
んな偶然性。

街角で擦れ違っても誰も互いを振り返り、もう一度会いたいと思
わない。何かのきっかけで名前を知ることがあつて、何かの際に話
すことがあつて、それでもそれが一度だけの出会いならば、何の縁
も生まれない。形にならない願いは約束にもなることがない。

（けれど、もしあえるならば“朝日学園”）

男女の区別も付かないような、人知を超えた美しさのその人物は
“朝日学園”と口にした。それは、犀臥が編入することを知ってい
たかのように、その特殊な事情を知っていたかのように、その言葉
は発せられた。

心の中で何度も繰り返し呟く。もう一度会いたい、と想いながら。

豆ほども小さな影が視界にちらついた。

迎えの者だらう。正門という境の内側から来る人物は未だ遠く、

——けれど、その人物に既視を感じた。瞬時に駆け巡る、銀灰色の
髪を靡かせた美しい人物。先ほどまで犀臥の脳を一杯に占めていた
人物。（——違ふ。銀じゃない。蒼）

迎えの人物の髪色は、遠くからでも目立つ、空の蒼。

「はじめまして。俺は案内の有島 唯ありしま ゆい」
にこやかに笑う唯は、犀臥の記憶の人物とは似ても似つかなかった。

整った顔立ち。だが女神のような美しさの人物と比べると平凡極まりなかった。

（雰囲気も正反対だ。なのに、何故思い出したんだろう）

それだけ、頭の中を占めていたのだろう。

直前まで考えていた人物を、期待を持って幻視した。小柄で、細い。平均的身長である犀臥よりも随分低く、同じ年頃の女子にも追いつかされてしまいそんなその背丈は成長期真っ只中の男子高校生の只中であって異彩を放っているだろうが、それだけだ。あの人と同じほどの身長と体格だとはいえ、全くの別人だ。でも声は似てるような気がする。

少しだけでもあの人を感じられるような気がする。それだけで心が落ち着くのだ。

「陽汐 犀臥ようせき さしがだ」

それは多分、恋だった。

「このことはどの程度ご存知でしょうか」

理事長室までの案内の道。唯が始終浮かべるの貼り付けたうそ臭い表情だ。名前と役割以外のことは話そうとせず、さっさと説明に入ろうとする。同室に対して親しくなろうとする気がないらしい。出会って数分しか経たない犀臥にその直接的原因があることは限りなくゼロに近い。それにも拘らずそんな態度を取られれば釣られて犀臥も不機嫌になる。

この学園には閉鎖的なだけに特殊な事情も多い。それに対して、犀臥自身、その特殊な事情が関わってくる為に特例入学を果たしたが、

「パンフレットに載る程度だろうな」

安易に話すことも出来ない事情だからこそ、口には出さないで無難な答えを用意する。

「陽汐さんは秀才と聞きましたが敷地内地図は覚えていますか？」

嫌味のように多少の嘲笑を込めた唯に若干正確ではない答えを返す。

「覚えてる」

暗にお前は必要ない、と案内役へと切り捨てる言葉を放つが、犀臥には予想外なことに、唯は素直だった。

「うえつまじ……！？冗談で言っただけどつ」

「うる覚えだがな」

「な——だ、騙したのか！？」

驚きに多少、無理矢理感のあつた敬語が飛び、唯本来の性格がもるに出てきた。即座に前言撤回を行えば絶句したように、これまた素直に黙ってから批判する。

「騙してねえ。覚えてるのは本当だしな。大体、こんな規模じゃ地図があつても距離感がイメージを食い違いを起こして遭難する」

「へえ」

感心したような唯は同世代というより、年下だ。子供が何かを教えてもらった時のように、無知を恥としない、知ることへキラキラとした純粹な興味を持っている。

兄のいた頃の自分はこんな風だったのか、と思つて、唯が同い年だと再び思い出した。大人ぶりたいのは態度に出てくる。そのため
の敬語だったのか。

「いいのかよ、口調。わざわざ使ってたんだろ？」

突然気づいたことに、くっ——と低く笑いが出る。

「いいんだよっ遊びだし！」

犀臥の指摘に唯は少し赤くなりつつ、意地をはるようにふんつと鼻を鳴らし言い切る。それをからかう様にまた言った。

「忘れてたくせに」

「煩い！——それより、」

強引に話題を変えてくる姿に余計に笑いがこみ上げてくる。

出会ったばかりの唯だが、そばにすることが楽しい。クラスでもムードメーカーとなるような人物なのだろう。

「改めて紹介」

「有島 唯。お前と同じ7号棟の6階、北奥の608室の寮生だ。クラスも同じで、暫くは世話係。だからこれから末長らくもよろしく——って、聞いている？」

ポカポカと心を暖める太陽のような笑顔だ。

なのに、霞む。——銀の月のように鋭く、儚い美しい人。

「——聞いてない」

聞いている。その声を聞いている。

——よく、似た声だ。

幾度も繰り返し響く、凜とした透き通る声。性別の分からなくさせるような、甘く、暗く、魅了する残酷な声音。……残酷さも鋭利さも無いけれど、その旋律はひどく、似ている。

強い言葉に真摯な瞳。綺麗な藍色。月色の髪が優しく流れていた。

（——違う。そんなはずはない）

目の前にあるのは蒼の髪。煌く夜のような漆黒の瞳。

深みも想いも過去も、何もかも違うけれど。被った面影と声——

偶然、か……？

気付けば、唯の顔が間近に迫っていた。

それに鼓動が早くなる。と同時に強制的に思考が半分呼び戻される。けれど、もう半分はやはりあの夜に浸かったままで、

（『刹那』——）

あの夜、一度だけ聞いたその名を口走りそうになって、でも違うのだと分かっている。それなのに、否定できない。

「……」

グイツと近づけたまま凝視し、停止する唯に犀臥は何をするでもなく、ただ唯に一瞬で心奪われた人物を重ね続ける。そんなチグハグな時間が一度過ぎれば、

「なに、やってんだ？」

今更な質問が出てきて、やおら体を後ろに退き、距離を取る犀臥。唯は停止したまま思考に引き籠もっているらしく、犀臥の動作に気を向けることもなく、ただそのままの姿勢で思索に耽る。

容姿についての考察（前書き）

顔がいいって事は俺にとって不幸だ

容姿についての考察

(こいつ、顔がいい)

それが息のかかるほど近くまで顔を寄せ凝視した末の結論だった。通常、容姿がいいというのは得と呼ばれるような付加要素だ。しかし物事には縁というものがあり、事象はそれによって深く絡み合っている。利点があれば不便もある。今回のことにしてもそうだ。この学校では幸か不幸か、容姿というのは個人に対する評価を大きく作用する特殊性があった。烏の濡れ羽色と呼ばれるような髪色。長い睫と切れ長な瞳は黒真珠とでも表現できるような艶めく宝石だ。身長は平均的な高校生男子よりも少し高め。凡そ男らしい、という表現は似合わないが繊細なつくりの顔は誰から見ても美形、と表現されるもの。中性的な雰囲気もある顔ではあるが、声やら性格やらは男と感じさせるようなもので、身体つきも程よく筋肉がつき、外見だけでも引き締まっている感じた。

真面目風に眼鏡でもかければ多くの者が教えを請いたい、と願い出ても不思議ではない。いや、この学園の生徒ならば鬼畜に罵倒して欲しい、と頼み込むような気もしないでもない。生徒たちが可笑しな行動を取り始めるほどに、犀臥の容姿は優れていた。

しかし、犀臥自身にその影響力が全く分かっていないようだ。この学園の実体を知らないとはいえ、警戒心が薄い、というのが犀臥に対する唯の評価だ。

その点において、唯は自己評価には正確だった。

己の容姿が所謂、整っていることは自覚しているが、目立って気にすることもない。不細工でないだけましなだけの、美形とは雲泥の差にある顔立ち。この程度は数多く生徒を抱えるこの学校では珍しくもなんともなかった。

同年代の同性。そんな限定された中でも優れた容姿の奴らとは必ずいるもので、そういう者たちはこの閉鎖的な空間の中、ある種の

催眠でもって掛かったように尊敬され、注目となり続ける。

顔の広い唯にも一際美形な友人だっている。そうすると独占に対する嫉妬のようなものを受ける羽目になるのだが（正直これは背負いきれない）

学校という閉鎖的な共同生活態の中で犀臥は住民たちの刺激となる。それは評価へと繋がる。“人気者”と有象無象との間を円滑に進めるための“親衛隊”という組織が朝日学園にはある。そしてそれは派閥だ。そして犀臥はそれに対し、大きな嵐となるだろう。大きく、動く。

犀臥に親しくするつもりがなかったのはそのせいだ。近寄っていらぬ嫉妬を受けるのは、地味に過ごしたいのが本音の唯には迷惑千万。しかし現実には唯の周りにはそういう“目立つ奴”が集まる傾向にある。何故と考えても答えのでない種類の疑問に、唯は日々頭を悩ませていた。

「でも、——万一もある、か」
一つ、呟く。

「なんだ？」

覗きこむような位置にある顔。

「……うわぁっ!？」

驚きに仰け反った体は安定していた視界を斜めに傾かせる。脳ではその不安定な体位から倒れているのだと理解する。けれど、その時に体は反応が遅かった。

硬直という状態に陥るのは動こうとする体と止まれと思う思考のせめぎ合いの為だ。普段なら友人たちがフォローするような唯の“ドジ”。けれど、この場には犀臥しかない。

（この程度のこと、何かを考えるまでもない）

倒れても、傷が出来ても、この程度のこと。よくある生活の一部だ。慣性のままに身を預ける。

「唯っ」

だから、手を伸ばしてきたのは予想外で。

少しでも回避しようとする意志があればそれに犀臥は巻き込まれなかったとわかるだけに、唯は、少しばかり後悔した。

春の日差しと影

「ごめんっ!!」

身を起こしてすぐ謝る。

衝撃に一瞬前、強く体を抱きこまれたと分かったから、すぐさま上体を起こして下敷きとなった犀臥に謝る。それに犀臥は下半身を乗られたまま上半身だけを起こす。

「別に。謝ることじゃねえし、お前は——大丈夫かよ」

ぶっきらぼうな言い方は照れ隠しだ。優しさの裏返し。

（こんな俺にも、優しくしてくれるのは……でも、何も知らないからだ）

唯という人物を知れば犀臥は、嫌うだろう。だから、辛い。今の何も知らないままの犀臥が接してくるのが。優しさを素直に受け取れない自分が、途轍もなく嫌に思えて、唯は、ただ、俯いた。それでも、笑顔は浮べたままで。

それが、唯にとつての一つの自己防衛。他者との壁だから、唯はいつでも笑みを浮べる。

「だいじょうぶ。お前が、守ってくれたから」

犀臥は「大丈夫か、」と更に続けたい気持ちがあった。でも、それが言えなくて、「退け」命令するように唯を促す。

本当は、固まったのだ。石の様に、硬直して、唯の浮べた笑顔に魅入る。俯きながらの笑顔は、真の意味では笑顔ではない。そうとわかっているのに犀臥は笑顔を浮べる唯の、その息を飲むような美しい完璧な笑みに啞然と、気を取られた。

（月の化身のような、『刹那』と、似てる）

どうしても、記憶は結びつく。二人は別人なのに、重ね合わせようとする。

（闇が、似てる）

それが気味が悪かった。変な因業を見つけどもしたように、奇妙な気持ちになる。

一つの符合が幾重にも重なり合う。

「なあ、犀臥」

退くこともせずに、唯は話しかける。犀臥の思考などと関係無しに、唯はその姿勢を変えることはなく、だからといって思索に耽らせることも許さなかった。

「お前知ってる？ 男子高校生って頭めちゃくちゃいかれてるって」
唄うように、唯は言った。それはまるで熱に浮かされるような、ぼんやりとした風情で、犀臥へと身を押し付けるように擦り寄りながら。

「女がいないならさあ、男子でもいいんだってさ。顔が良けりゃあ、ね」

犀臥は唯の瞳から眼が離せなくなりそうだった。奥底の見えない瞳は何を考えているのか分からない。何より、犀臥は吸い込まれるまでに近づきそうになる自分自身がわからなかった。

（同性に対して、こんなに近づいて、なのにもっと近づきたいと思うなんて……）

以前なら確実に感じなかった。しかし、唯になら、そして“刹那”になら、手を伸ばしても届かないような、そんな気がして、もっと近くに行きたいと思ってしまう。

何故、一度会っただけの刹那に、何故、先ほどあったばかりの唯にそんなことを感じるのか。

地面に尻をつく犀臥の上に、向かい合うように座る唯はそのまま顔を近づけたかと思うと、たんつと音の鳴るような軽さで胸元へと頭を預けた。

「無用心、じゃねえ？ マウント取られるなんて」
ぼつり、と小さく呟く様子が、何だか子供のように思えて、犀臥

は自然と腕が上がる。

「……いくらでも反撃できるさ」

手は頭を撫でようとして、けれど純粹に見あげる瞳に気付いて、身体を引っぺがした。

「つてて。さすが——編入生だけある。運動神経、というか体捌きも完璧」

「脅すなよ、“先輩”」

地面に転がる唯を尻目に立ち上がり、見下ろす視線で軽口に付き合う。

——雰囲気の変わりように、驚き、けれどそれは隠した。

触れてはいけない何かが、唯にはある。それは誰にもあることだ。そして、不用意に暴き立てる事は、あつて間もない人物がするべきではない。傷つけたくないのなら、それこそ。

「さ、ちゃっちゃか行くぞ！予定が大幅に遅れてんだよ」

腕を振り上げていう唯には闇の欠片すらも無く、太陽の明るさを纏っていた。

「生徒会じゃないから授業免除もないし、勉強についてけねえじゃん！お馬鹿になったらさいがのせいだからなっ」

「俺の、せいかな……？」

微かな質問は春の陽に霞んで消えた。

そのことに浸る余韻も無く、唯は犀臥の手をむんずと掴み、進む。
「早足、行進！」

女神はサイコロを振って

「要点だけ言う」

唯は真剣に、前置きをした。

「1、男子のみで華がなくなると美形に尊敬以上感じる奴がいて、親衛隊とか作って神聖だなんだと騒ぎ立て虐めや派閥問題勃発中。2、豪華すぎて庶民と金持ちの価値観の違い、虐めなど勃発。3、施設は校舎が四つ、委員会棟と部活棟、職員棟の三つが他にある。正門から左は居住区で寮が五つに、スーパーやレジャー施設が隣接。寮内の規則は寮ごとに長が決めてるけど、学校からは何の校則もない。制服は四種類のうちから着用。……以上」

詳しいことは、後で。

早口に簡潔に。他者の口を挟ませない勢いで言い切った。

そして犀臥には口惜しいことにタイミングまでもが味方をし、唯は己の使命を一部全うした。

「はい、理事長室にご到着！」

ででんつという効果音の似合いそうな風に紹介された理事長室、正確にはそこへと通じる扉。

豪勢なのは内装だけでなく、こんなところにも使われていて、扉は大きく、豪華、細工は繊細に、人を圧倒する。人よりもよほど存在感と圧迫感、迫力を持つ扉だった。

「時間潰してくるから、また後でな」

「あ、おい——」

握っていた手に未練の欠片も残さずにさっと離れていく様は、どこまでも命令に忠実、ということを思い出させて。（唯が“世話係”でなかったなら、こんな時間はなかったのか）考えて、親しくなるつもりがないのは言葉を交わして互いに知り合った後でも変わらないのだろう、と結論が出る。でも、納得がいかない。

出会ったばかりの唯が数年来の笑顔を思い出すほど、思わず笑みを浮かべてしまうほど影響を残しているというのに、唯は犀臥に対して何も思うことがないなんて。

言うが早いのか、踵を返す唯。けれど一瞬だけ後ろでに振り返り、

「あ、あと強姦に注意」

「……はあ!？」

感傷的な気分になる犀臥に投下された爆弾は何が起こったかもわからないままに爆発し、けれど状況を説明する役の唯はさっさと背を向けて廊下に陰も見つからない。

「陽汐ようせき 犀臥さいが——転校生ですね」

「つつつつ!？」

(今、気配なかったぞ——!!)

「秘書の、西川です。速やかに入りなさい」

背後にゆつと現われた人物は振り返れば存在感を主張するような鋭利な美貌の美男子。二十代、しかし仕事はかなりキツリチとしているようだ。神経質そうに眼鏡を上げる仕草をしてから腕時計を見ると、書類を手に抱えたまま犀臥を理事長室へと促す。

犀臥の驚いた顔は面白かった。

唯は理事長室のある職員棟、その上部の休憩室にて自販機を見つけ、学校側から支給されたカードを取り出し、それをスライドして紙パックのコーヒーを買う。500円ほどするそれは値段と釣りあった味をしているが、唯はその味を求めて高級品に手を出しているわけではない。これ以上に安い飲料など学内では入手できないからという理由での購入だった。

手持ちを、それも小銭など持ち歩く習慣がない金持ち生徒たちのことを見越し、ゴールドカードでもプラチナカードでもましてやブラックカードでもない、学内用のカードが支給されている。学年や特権制度による生徒の“地位”によって色が区分されているために

紛失時は大変なことになる。再発行までの一週間は学内の物価が高いために一般生は財布が火の車になること必死だし、悪用されれば何が起るやら。朝日学園には優秀な人材が集まる為にその殆どがいろんな場所でいろんな形で免除がされる。それが特権制度だ。

かく言う唯にも特権制度は適応されており、それは大概が一般庶民である唯にたいする金銭的免除であって、食堂の無料利用やら施設の割引などのつくその特権は実は学内でも喉から手が出るほど欲しいとされている貴重な、各学年一人分しか用意されていない特権——主席特権だ。血の滲むような努力をして勝ち取った、といったもいいほど唯はこれに懸けている。

（このカードが寮の自室の鍵ともなってるから不安なだけで）

黒銀色に輝くカードを見つめて、ぼんやりと思う。

寮は基本的に二人部屋だ。主席は一人部屋となるのだが、一年は犀臥が入ってきて人数に焙れた為にそれまで一人部屋を勝ち取っていた唯が生活を共にすることになった。そのことに未練があるわけではないし、納得がいかないわけでもない。

ただ、寮の部屋の鍵というのはこの特権カードとは別に配布されるものだ。スペアは寮長が持っているし、それほど紛失に対する心配も本来なら要らない。

（けど、犀臥は美形だ）

同室ということで嫉妬を受けること。それは仕方ないのだ。それでも厄介なのは、部屋に乗り込んでこられたら、ということ。唯一人の部屋には誰かが押し入るようなものはない。だが、犀臥の部屋というのは、随分と生徒たちにとって価値があるものになる。

ジュー、と音が立ちパツクに中身がないことを知ると唯は飲み干したそれを軽く潰し、近くにあったゴミ箱へスローイン。お見事、と自身に拍手しながら体を預けていた壁から背を放そうと身を屈め、——視線が向けられた。

その一瞬後。

「君、——そこで何してるの」

「っわ！」

自身に影が掛かるほど接近していた人物を見あげようとして本日二度目の仰け反りをし、唯は壁に帰った。

「何、その態度」

「い、いえ……ただ、急に声をかけられたのでびつくりしたただけで、鋭い視線はきつい目元から来るもの以外にも含みがある。」

何も間違っではない。ただ、急に人が現れたから驚いたのではなく、話しかけてきた人物が“生徒会役員”という人物だったからだというだけで。

けれども、あえて付け加えるならば人気のない場所で話しかけられた幸運さと、話しかけられたこと自体に対する不運と、誰かに見られていたら親衛隊からまれなく“お叱り”という名の暴力を受けそうな不安と、生徒会役員ではあっても“この人”でよかった、という安堵。

複雑に絡まりあったそれらが唯の胸を襲い、けれど一瞬で嵐は去った。

「——話の通じそんな人でよかった、と」

生徒会副会長、法宵 栞。

こんな場所にいるのは免除を受けている生徒会役員が執行部、もしくは絶滅危惧種ぐらいに少ない不良たちだろう。そしてその中からめでたく生徒会役員が偶然に選ばれた、ということだろうか、とサイコロを転がした女神を呪うべきかどうかを考え始める唯。

観察の瞳は裏の色

唯の着用している制服は四種ある内の、“執行部”側所属を示すものだ。生徒会は執行部に干渉。しかし、生徒会側の栞が執行部の生徒とわざわざ係わり合いになろうとする行為の真意は単純明快。執行部の失脚に繋がることはないか、と気まぐれに話しかけたに過ぎない。それも規則に頭髪の規制はないからと青い髪、という珍しい色をしている唯に眼が向いただけでもいえる。そんな栞は唯に腹黒、参謀、と思われるのはある意味で正しい。学内での評判は既にそれで定着していると云えたのだ。しかし栞はその黒さを隠すつもりがさらさらなかった。

「それで？こんなところで何してるの。授業はもう始まってるはずだけど」

「俺、編入生の案内です。編入生を教室まで送るので、少しの間待ってるんです」

冷えた声に、けれどいつも通りの温度で唯は答える。嫌味な客にも営業スマイルを忘れない「スマイル0円」店員を思い浮かべて平常心に笑顔を浮べた。

「――君が編入生を？」

訝しみを覚える栞。生徒会・執行部と色の決まっていない転入生に一般生徒を宛がえばそれは洗脳のように偏った知識が刷り込まれる。公正さを備えた人物がそのフロアに当たるのが通例。――例外は、最初から派閥の決まっている者が入る場合。

「ええ、同じ教室、同じ寮、隣室でもありますし。お世話係を担任から任されました」

（執行部側の――“裏”側の人間か）

十数年前、最初の“能力者”が現われた。そこから始まった、混乱は今でも収まるところを知らない。“新人類”“化け物”“超越

者”“異端者”——数ある呼び名はそれぞれの向ける感情だ。人知を超えた力を持つ、突発性の新種——能力者。

能力者は世間的に立場を追われ、そして崇められる。いつだって差別に塗れた存在だ。そんな中で、朝日学園は能力者の地位向上を目指す特殊な地位にある。

「……こつちには連絡来てないんだけど」

裏と呼ばれるのは能力者側。表は通常人の側のことだ。

もし、生徒会側に連絡もなく、執行部側の人間が転入生の世話役をするというのならば、それは確実に黒——陽汐ようせき 犀臥さいがは能力者だ。そう結論付けると栞は興味を犀臥から移す。思慮に沈んだ視線を唯へと向け、

「そっか、じゃあ、また近いうちに」

「へ——」

「生徒会から編入生へ、挨拶しに行くから」

唯の反応も構わずに、栞は笑顔で去る。

じゃあね、と言って背を向ける姿は先ほど唯が犀臥に向けた態度と同じで、自業自得か、と己に納得させる。不吉な言葉には聞かなかったふりをして、唯もまたその場を後にする。

「生徒会のこと、聞いた？」

扉の外で待つていた唯が問いかける。その内容に先ほどまで会話してた理事長を思い浮かべた。聞かされたのは、男子校というある種病気みたいな特徴だ。切り出しは『同性愛のこと、どう思う?』

それに対して、犀臥は詳細な説明を彼らの立場から求めた。理事長、朝日あさひ 旭あさひは学校側の介入を拒んだ。校風の自由はその自治すらも、その責任すらも生徒に背負わせるためのものだ。強姦等事件が起きて、虐めが発生したとしても、不干渉の立場を取ると。生徒を纏める立場、代表者としての生徒会。そして生徒を取り締ま

る立場の執行部。そして、生徒の人気を募る生徒会。絶対に問題を起こさないと教師たちからの信望の厚い人物や、間違っても強姦など行わない異性愛者などを募った執行部。――“表”の生徒会と“裏”の生徒会の確執。

理事長の生態

「いや……」

少し考え気味に犀臥は否定する。

それらに対する説明は十分に、しかしそれ以外の説明はすべてま
るつと放棄された。つまり、生徒会の選出法など特殊だと聞いたの
みで、どのように特殊なのかは聞かされなかった。

「ったく、仕事サボって」

唯は愚痴のように言葉を零すと犀臥の背後、巨大なる扉をノック
もせずの開くと、僅かな隙間から覗き見るようにして中の人物に視
線を移す。理事長である旭はどっしりとした立派な机に書類を乗せ、
けれど両脇に寄せて中央部に写真を置き、仕事放棄してそれを眺め
る。

唯の行動に気付いた様子もなく、にやける様子に軽く溜息をつく
と声をかける。

「きちんと仕事してくださいよー！理事長」

「唯くんっ！あいたか——」
ボタン。

「というわけで」

「何がどういう風にというわけで、で終わるんだ。いいのか、あれ
で、ああなんなんで」

声に反応して顔を上げるのはコンマ何秒も掛からなかったが、キ
ラキラとした旭の瞳を受け止めることなく、唯は無残にも扉を閉め
る。

そんなやりとりをなかったことにして笑顔を犀臥に向ける姿に少
しばかり同情をもたらした。自業自得とはいえ、全身で喜びを表し

待っていたという旭の眼を交わす唯は思ったよりか純粹ではないのかもしれないと同時に思う。

「いいんです。関わらないで下さい。頭がちょっと、あれなんで」
涼やかな声が掛かる。それは少し前に話したばかりの理事長秘書、西川。

彼は犀臥を理事長室に促すと温かなお茶を入れてから視界から消えていた。その行動はいつのまにか、というに相応しい鮮やかな手腕だ。再び現われた西川はやはり、自然と現われていて、不気味と感じるよりも感心を覚える。人のサポートという影の役割は目立つことは具合が悪い。しかし来賓への対応は華やかさも必要である、その両面において西川は合致した人材なのだ。その頭の回転の良さも参謀、宰相、副——そんな言葉が似合う。毒舌さえなければ完璧な人物だ。

「おお？珍しいですね、あなたが俺のいる前に出てくるなんて」
珍しいこと、と思うのは西川が唯に近づかないからだ。

彼は理事長という立場でなく、旭自身に恩義を感じ、尊敬を持ってこの場で働いている。引く手は数多ある中、秘書という立場に甘んじているのも、旭の手助けをしたいと思ったからに過ぎない。口では仕方ない人だ、といいつつも感じる恩敬は変わらずに根底にある。

しかし、解せない。有島唯という一個人に対しての見解だけがどうしても噛み合わない。

いくら血縁とはいえ、理事長という立場にあって唯に対して過剰すぎる態度を取っている、と西川は思っていた。公私の分けられる人物だと知っているからこそ、その行動は——男としての、行動に感じ取れる。旭を狂わせる人物——唯を、だから西川は嫌いだった。「編入生のためです。仕事です。説明します」

「生徒会長は優秀なことは勿論、生徒の人望も厚くなくてはいけな

いということ、それを眼に見える形にした“ランキング”という選挙の上位者から理事が任命します。他、生徒会役員はその時に決まった生徒会長に新任権がありますが、それもランキングで上位者であることが条件に挙げられます」

西川はまるで教本でも読むかのように、抑揚も無く言葉に詰まるでもなく、話す。

「そして執行部も同じく理事によって新任されます。その重要項目は人気でなく、家柄。実力——」

「もれなくランキングの上位者でもある、ってわけだ。例外も無きにしも非ずだけど。二つは拮抗した勢力であり、互いに均衡を保ちあう目的に作られているためか、生徒同士は中が険悪で、そのため制御しあうどころか不干渉条約を結んでるみたいになってるのが現状」

「教師は何かしようとしなののか」

犀臥の疑問は旭にしたものと同じだ。自由の校風ゆえの束縛性の無さが暴走に繋がるということは長年続けていけば分かる結論であり、そのことに對しての学校側の対応が変わっても良さそうなものだ。——だが旭はスタンスを変えようとはしない。

それについて、西川はどう考えているのか、そう尋ねたのだ。

頭の切れる男だ、案の定、それを読んだ。しかし、その言葉は事務的。

「教師はあくまで教師です。勉強においては先達者ではありますが、生活自体には口出しする権限がありません。地位的にも生徒会と執行部が頂点、その下にそれぞれ教師が付くことになっています。その更に下に部活動や委員会が付属します」

どっちにしろ、生徒会の派閥か執行部の派閥かに分類される、ということだ。

（しかし、それでは“裏”と“表”が誰にでも判別できるということではないのか——？）

犀臥の小さな疑問は誰にも答えられることなく、胸の中で渦巻く。

罪悪感の中で微笑む

「教師も人だからさ、権力チラついたり、学内での関係性がこじれると問題が起きるんだよ。下手に口出ししない方が身のためって奴」
唯が付け足す。口調は軽くても、その内心が複雑なのは苦々しい響きが表していた。

「事件については？生徒会が処理するんだろ？」

「無理無理。諸悪の根源。生徒会が仲裁に入る方が激しくなるよ」
どうにも出来ない、と完全否定するのは途中編入した唯には覚えがあるからだ。一時期は同じようなことを考えていたが、事態が好転することなどなかった。諦めるしかない状況に至って、先達者としての言葉を犀臥にかける。

「原因が彼らに近づいたから、という“制裁”理由では庇うと余計に過激化する可能性が高いですから」

「——とにかく、生徒会のことは要注意だな」

「ま、普通にしていれば会うことはないよ。特別許可制度の奴らだから」

先ほどのような出来事は例外だ、と唯は心の中で愚痴た。

「特別許可制度？——確か、家庭の事情による免除制度だったような……」

そんなことも説明されていないのか、とこれまた学園生活内で必要なキーワードに対する説明不足を旭に諦めでもって覚えた。一体アレだけの時間に何を話したのか——考えずとも、始終マイペースな旭は優雅に飲み物を飲み、楽しげに会話していたのだろう。時間も仕事も気にせず、（生徒との会話が楽しみの生活って……）

ご隠居が孫に対する心境と同じではないか、と唯は思う。その認識は斜め45度ほど間違っているのだが、心の内のみで思うので指摘する者もない。

「家柄のためだよ。家の仕事優先で、まあ、それも社会貢献って事

で単位がもらえるようになってる。変な制度だよ」

「社会貢献？」

「パーティーとか、父親代理とか。人によっては経営自体負かされてるからさ、そっちの仕事とか」

「主席の授業免除とは違うのか……」

難しい顔で理解しようと努める犀臥に唯は言葉を重ねる。

「ああ、あれね。こつちも特殊。生徒会の授業免除は行事などで忙しい時期のみ使える一時免除。執行部は学内に対する問題に対する全般的な取り締まりだから、問題児に対処することが多くて、つまりは授業中とかばれる奴とかね。だから、執行部はいつでも授業免除」

「主席免除は当たり前だけど、全教科総合9割以上を毎回取ること。それと、最低でも各学期各授業で五回以上の出席義務。こつちは特典があつて、一人部屋と別途料金施設の年間利用割引——これ、俺ね」

「……はあ！？お前、主席——」

激しく動揺を表す犀臥に唯は悪戯が見つかったような子供のよう
に笑った。

「じゃ、教室行くか」

言つて歩き出す唯に後着けて犀臥は静かな廊下を歩く。

閑静な空間は唯に似合わないようで、とても似合っていた。華やかな雰囲気と落ち着いた雰囲気の両立した唯という存在を不思議に感じる。今までにあつたことないタイプ——そう思いかけて、やはりチラつく銀の麗人。

中学男子がいつでも性的なことを考えるように日常的に、小学生が悩みにストレスを抱えることがないぐらいに純粹に、犀臥は刹那のことを思い出す。

（まるで唯を否定してるようだ——）

真逆の二人を重ね合わせて、目の前にいる唯から一度しか会っていない夢のように朧な刹那へと思い馳せるのは現実を否定し、唯を否定し、……犀臥はそこまで考えて頭を振った。

思考を変えるように話題を作る。

「そついや、随分理事長と仲がいいみたいだな」

「ああ、理事長は誰にでもフレンドリーだよ。つても、あんまり皆の前に顔出さないけどな」

前を歩く唯は犀臥のことを見ることなく、静かな廊下を歩く。犀臥の言葉にも普通に、明るくも低くも無い態度で答える。

「顔がいいって、いうのが関係してるのか」

「あたりー。俺もさあ、中途編入なんだよね、二年前来たから。だから、顔見知り。ついでにメル友」

ほれ、と携帯を見せる。

ちらつと振り向いた唯は、けれど笑顔で、なぜだか犀臥は罪悪感を覚えた。

闇の比重

「たーんにーん。編入生、連れてきましたーあ」

唯が犀臥を廊下に残して教室の扉を横に引く。がららら、と音がするのこちらを見ると担任は開口一番、唯へと低く小さな声量の「遅い」という言葉を贈った。そのまま射殺しそうな勢いの強い視線で手を振り上げるのに、唯はそのまま丸めた教科書攻撃を受けるわけもなく、射程距離から一步廊下へと逃れる。

「暴力教師。横暴。変態。鬼畜好き」

「……ほほう、有島は俺の何たるかを知っているようだな。ついでに体験してみるか？」

「え、えんりよします……」

寒気のような笑みを浮べてスカツた腕をもう一度、構えなおすのにひきつった笑みを浮べて唯はぎこちなく拒否する。（言葉は暴力だよな、うん）

「時間が無いから免除してやる。ほら、さっさと一分で自己紹介しろ、転入生」

眼で示す行動に唯が己の席へと腰を落ち着ければ、それとは逆に教室の中心へと向かった犀臥に歓声が上がる。容姿を褒めそやさす言葉や好奇の目線、品定めするような空気に、様々に複雑絡まったものが漂う中、そんなことは一切気にしないとばかりに犀臥は前を見据えていた。

「陽汐ようせき 犀臥さいが——転入生だ」

犀臥が口を開くと同時に静まり返った教室内で落ち着きのある声は凜と響いた。

「席は後ろにある、あの空いてる席だ」

不自然な静寂の中、担任が指示し、犀臥は道に行く。

そして荷物が置かれ、席に座ったのを見ると、ワツと空気が騒然

となる。

「さつさと黙れガキども！」

鋭い指示が熱くなつた空気に水を差す。

「予定が詰まつてるんだ、質問は後にしろ。黙って俺に従って入学式を無事に終えやがれ」

「唯、おはよう」

「はよ、委員長」

唯に声かけたのは月匙つきじ 空そら。委員長と呼んでいるのは学級委員でもあり、委員長でもあるからだ。そのままの呼び名だが、あだ名として定着している。なぜなら生粋の学園生である空は学級委員になつて四年目となり、既に不動となつている長の座なのだ。雰囲気からして落ち着きがあり、人を纏めるのが上手く、口も辛口ながら上手く周囲を誘導するのに長けた空だ、唯が初めて会つて開口一番に委員長と呼ぶほどである。

「あんな美形編入生の世話係りなんて、授業も休めて美味しい役だな！」

「なら直ぐに交代してやるよ、ソウ」

授業を休むことが特待で成績の落とせない唯にどれだけのダメージになるかわからないのを考えてか、思いつかずか（明らかに後者のだけれど）いろんな意味で鈍いこの男はそれでも学園の中で“王子”という称号を授かるランキング上位者、海炉かいろ 蒼也そうや。

「嫉妬、買いそうダヨネエ？」

やけに楽しそうにニヤニヤ笑うのは宇治 倭やまと。皮肉げに歪んだ口元を見て、何かやるつもりだな、と慣例のごとく察せるのが空しい気分になる唯だが、それで被害を被るのはいつも自分だ、と気付き溜息をつく。

「ぐう……」

転入生の挨拶も周囲の騒ぎ立てる声にも聞らず眠りの国から旅立ったまま戻って来ないもう一人の友人、柄島^{つかしま}深^{しん}。移動の声に立ち上がるクラスメイトの只中にあっても、机にうつ伏せ中である。

「シン、移動だって。起きないと知らないからなー？」

「うう……ん、い、く——」

寝起きはいい。声をかければ直ぐにでも起きる。大きな背中が起き上がるのに巨人という印象を抱くが、それは比較対象である唯自身が標準サイズより小さいからに他ならない。頭が働かないまま寝ぼけ眼を腕で擦ると、ほとんど同じ背丈の倭の背に体を預けながら歩く。

「ちよつと、涎垂らさないでよ？ていうか寝るかな、普通」
すやすやと歩きながら眠りの国に戻ったシンに倭はぼやく。

四人と唯、友人関係を築いている。それは変わりようもなく、変えられようも無く、——犀臥はクラスメイトたちに囲まれながらそれを見ていた。己の周囲に集まるのとは対極的に、小さくも唯を中心に集まるその空間に、犀臥は仄暗いものを感じる。けれど、知らない。

四人が陽だまりのように心地よい関係を築いている間で、何を抱えているのか。何があったのか。——そして、知らないままに犀臥はそれを「壊したい」と思った。

唯への嫉妬か、四人への嫉妬か、あるいは——寂しさか。

闇は犀臥の心を軋ませ、歪ませ、偏る。瞳に映すのは銀色だといふのに、蒼色を欲しがる。

犬家族

入学式を寝て過ごした唯は教室に帰ってきてホームルームを受けていた。しかしそれもすぐ終わる。担任はやる気無く午後の予定である新入生歓迎会にて部活紹介を見て部活を決めると言い放ち、プリントを渡して来るほか、後は気だるくどの委員会に入るか考えとけ、と言った限りでプリントと荷物は自分で取れとばかりに教台に無造作に乗せた。

混雑しないように互いに気遣いながらだったために時間が掛かったのか各自必要分を取ると落ち着く間もなく午前授業終了の鐘が敷地全体に鳴り響く。

どこから響き、誰が鳴らしているのか。唯のそんな二年間の疑問が解決されることもなくあつさりと途切れるの重く響く金属音。しかし、それを合図にしたかのように酷く人工的な音が掻き鳴らされる。

「飯——！！！」

椅子を引くことも煩わしげに立ち上がる蒼は担任の存在など忘れ去ったかのようにすぐさま唯の席へと群がる。「お母さん！腹が減って死にそうだよっ」

その言葉にがつくりと力の抜ける唯だが、続けられる言葉にもう一度はつきり呆れを覚える。

「母さん、俺は背中と中がくっつきそうだなあ」

「誰が母親だ、誰が！」

怒鳴るように反論しても全く取り合う様子のないソウと倭は椅子を持って唯を中心に集まる。といっても蒼は唯の前の席なので椅子と体の方向を変えるだけなのだが。

「俺はお前らの母親になった覚えは一瞬足りとてないぞ！お父さんと呼べ！」

ツツコミどころを間違えまくった唯の台詞に空が笑う。

「ほらほら、お母さんに笑われてるじゃないか」

「俺はこんな大きな子供を持った覚えはありません」

軽口でウィンクして言う唯にぴしゃん、と障子の閉められる音でも鳴りそうな勢いで断絶するのにソウはシュンと項垂れ、倭は無視した。当の唯は苦笑。当然の如く分かっていた結果だ。

空の冷たさがツンデレであると知っている唯から見ればその態度もかわいものだ。蒼の人懐っこさは犬が尻尾を振るのに似ているし、叱られれば耳を垂らすように見ていて飽きない。

（あ……犬家族か？もしかして）

倭の食えない様子は猫っぽい、とか考えつつ唯は迅速な行動を促す。

「ほら、お兄さんを起こして上げなよ、倭」

「え？」

「ソウは買出し！」

矢継ぎ早に言つて、空と一緒にそこの机をくつつけ始める。

よくあることなので周囲にクラスメイトに借りる旨を言うことも省略してサイドバックから風呂敷に包まれた重箱弁当を丁寧に取り出す。

「よ、犀臥。お疲れ様」

近寄る犀臥の影を見て何の銜いもなく唯は声をかける。

「いつもこんななのか？」

「まあ、大体は」

指していることはわかる。鐘が鳴ると同時に立ち上がった素早さも歓声のように叫ぶ食事への期待も犀臥、というよりは初見にはキテレツに思えるだろう。

そもそも鐘が鳴っても教師が終了を言い渡すまで授業は終わりではないのだから、納得がいかないというより不可解な現象のはずだ。勿論、この学園の生徒ならば教師よりも生徒の方が立場は上なのだとよく知っているのでそのことを疑問に思うことなく、教師もまた生徒に注意することも無く静かに立ち去るのだが。（普通じゃ、あ

りないよな)

「陽汐。飲みもん何か買ってこようか？」

「あ、いや俺は――」

尋ねる蒼にたじろぐ犀臥だったが、そのことには気付いてもないのか返事を洩る様子に疑問を抱え矢継ぎ早に言葉を重ねる蒼。

「一緒に食べるだろ？唯の料理は上手いんだぜ」

「蒼は自分のことのように褒めてなくていいから。それより、連れて行って売店の場所を教えたらどう？その方が効率的でしょ」

「……なんかすまん」

空までが蒼に同意するので何も言えなくなる犀臥に気兼ねして唯が言う。

「気にしてない。そっちこそ、大丈夫か？」

「ああ、うん……。いつものことだしね」

心配されて、どきりと胸が立てる音に表情が硬くなった。けれど唯は考えすぎだ、と思い直して普段の通りを装う。

(犀臥は気付いていない)

そのことに安堵する。

悪意の視線なんて、唯にとっては慣れたもの。けれど、そのことに誰かが気付き、気遣うなんてことには、ならないで欲しいと思う。(望んで、友人の立場を取っているのだから)

宣戦布告

結局、犀臥はゆっくりと己で覚えていくとのことであたの機会と相成った。それぞれにブドウ（倭）、野菜（空とこの時だけ起きた深）、いちご牛乳（唯）、コーヒ―（犀臥）とそれぞれ飲み物を頼んで、蒼に走ってもらう。

「ほら、シン」

その間にそれぞれで自己紹介でもしようかと唯が斜め前の席の人物を揺り起こせば、のっそりと起き上がる長身に少しばかり気圧されるようにして犀臥は一步下がった。

「柄島 深……睡眠がマイらいふわーく。ぐう……」

半分閉じた瞳で挨拶をする様はいかにも寝ぼけている。言葉だけ聞けば非常に可愛い物言いだ、実際の深は美形男子だ。細身であることやどこでも寝る癖などが非常に愛くるしい。ぬぼつとした風感は切れ長の涼やかな瞳を完全に消してどこかマスコットキャラクターのようだ。しかし、やはり大柄な男だ。その行動も大型犬のそのようだ。

絆されそうな気分になつて犀臥は微妙に苦々しい思いを自分に覚える。

「俺は宇治 倭ね。よろしく」

すつきりした声で犀臥の視界に移りこむ夕焼け色の存在に思わず目を見開く。さきほどから驚いてばかりの犀臥は唯の友人たちは驚かせることの天才だと感心せざるを得ない。

「珍しく自分から紹介するのはいいから、退け！重い！」

犀臥と合っていた眼の高さが深の寝ぼけつつの攻撃によって沈み込んだ唯。再び、その上から追加される重りに文句を言うが、片方は全く意識を回復することはないし、もう一方にしる面白がつてやっているので自ら退く気配もなかった。

「委員長」

身動きの出来ないまま、机に捕まって顔の高さを維持しながら呼びかける唯だった。が、無理、とばかりに視線で流され、「そんな殺生なあゝ」と心のみでなく呟く。

「俺は月匙つきざし 空そら。去年までは学級委員長をやっていたから唯にはそう呼ばれてるけど、今は“違う”から」

（笑顔で強調するのは暗にそれ故に助けない、と言っているのか？）

「よろしく」と言って手を差し出してくる空に犀臥は新鮮な気持ちになり握り締め返す。

クラスメイトの中でこんなにも心地よく、常識的な挨拶をしたのは空が初めてだった。

他は有象無象、と紛れるようにして口々に言うものだから誰が誰だかをはっきりしなかった上に馴れ馴れしく、また媚びが含まれていてこれが学園の現状なのか、と説明だけでは得られなかった実感を犀臥は改めて覚えていた。

唯は役目を果たそうと努めて冷静で距離を取った態度で接してきたが直ぐに玉砕し、ラフに変更した。そのことを思い出して、少し苦笑するようにして名乗り返す。

「こちらこそ、よろしく。犀臥だ」

「いいんちよ……」

空に無視されて、容赦なく、押しつぶされている唯が切なげに名を呼ぶ。あだ名だが。

だが、その音色にいつものこと、と呆れた視線で見やる空とは対照的に犀臥は動揺した風に唯を見つめる、間は無かった。

「俺、海炉かいろ 蒼也そうや！よろしくっ！」

「うぎゅ……っ」

「でさあ、“ようせき さいが”ってどんな漢字？」

三人目で更に押しつぶされた唯が呻く様な声を奇妙に表現してみせたが、犀臥は身を乗り出して紹介する男の勢いに押されるような形で質問に答えを出す。

「太陽の陽にサンズイの着いた夕で“せき”、動物の犀さいの“さい”、

臥すの“が”で陽汐ようせき 犀臥さいがだ」

「うわ、ぜんぜんわかんねえ……！」

（やたらとキラキラした目で見られるのは何故だ）

尊敬するような眼差しで見られる覚えもなく、相変わらず押しの強い個性あるメンバーに若干押され気味の犀臥。

「これを機に少しは勉強したらどう？」

「え？唯か空が教えてくれんの？」

「嫌だね」

空が言い含めるように言えば勘違いなのか嫌味か、よくわからない言葉で反撃してくる。それにも空は冷たくばつさり、切り落とす。もう一方の問いかけられた人物といえば、

「そのまえに……離せ馬鹿共——！！」

押しつぶされ、押しつぶされ、押しつぶされな唯は全身でもって拒絶。暴れるという行動に出るが、被害は最小限だった。被害者も一人、眠ったままの深のみだ。一番罪のないといえるのに、蒼は一番上のために素早く逃げ、倭も生来のすばしっこさがこんな時ばかり発揮される。

得物を二匹取り逃がした唯としては不満ながらも、悪気のない深を起こすのも憚られたので、体をずらして膝枕状態へと移す。それをどう取ったのかは知らないが深はそのまま体を椅子のサイズに収めるように動くと、パッチリ眼を開けた。

「さあ、食べ！」

促せば待ち遠しかった蒼は誰よりも素早く。ノリだけで生きているような倭はひよいひよいと好物だけを取って食べていく。ぬぼっとしたまま夢気分の深までもむしゃむしゃと食事を始め、空は行儀良く食べ始める。それを見て、犀臥は少しずつ料理へと手を伸ばした。

「やっぱ、はじめは食堂の方が良かったか？」

「否——」

何の感想も漏らさずに他を観察しながら食べ進める犀臥に唯が問いかける。しかし、犀臥は何も気に入らなくて無口だったわけではない。

食堂の安い料理とは違い、カロリー計算もされていそうなバランスの取れた弁当は見た目も味も一級品で、色彩は鮮やかで適度に飾られて作られている。長時間煮込んだ口の中で蕩ける感触の肉や凝って作られたとわかるオリジナルドレッシングなども用意されていて、自活を主とする寮生の昼食としては、朝の忙しい母親の作る適度に美味しい時間の掛からない弁当と比較しても随分と豪勢でさすがは金持ち学校、と納得したくなる弁当だった。

では何故口数少ないかといえば、単に犀臥が寡黙な気質であることと、この弁当について思案を重ねていただけに過ぎない。唯の心配は見当外れどころか間逆だった。

「料理が趣味なんだ。週に数回持つてきて教室や屋上で食ってる」
ぴよこ、とウサギが耳を動かす仕草というような表現が似合いそうに反応した犀臥は言葉の主である唯を見つめ、一言「おいしい」と漏らした。

唯は犀臥のコメントに驚いたがゆっくりと噛み砕いて理解するとはにかんだ。

「にしてもさあー入学式なのに午後もあるって変だよなあ」

ぼやく蒼だが、その割には残念そうでもつまらなそうでもない。口ではなんと言っても蒼は何事も楽しめる性格なのだ。授業も勉強も苦手ではあるが嫌いではない、というのが本人談。実際のところ、唯から見ても蒼は勉強をしないだけで基本的にやれば出来ると見ている。学園に入学できたのもその土台があったからだ。

「そうでもないよ。生徒はみんな寮生なんだから近いし、授業だったらきついけど、この後にやるのは新入生歓迎会だしね」

「部活何入るのかなあ。決めた？」

「唯は家庭部、期待の星だから決定も同然だけど」

「ええ？」

いつの間に期待の星になったんだ？と首を傾げる唯を横目に会話は続いていく。

「深は去年と同じく茶道部？」

「そう。一杯、寝て、一杯、食べる」

「いや、それもどうかと思うけど。倭はー？」

「俺は夕方から忙しいから」

きっぱり言う倭におや、と思えば

「どう？今夜あたり犀臥、空いてる？これ部屋番——」

「ちよつと倭、食事中」

変なことを言い出すのは変わらない。

「はいはい」

適当に言葉を返す倭に唯は頭一つ分以上高いそれを叩く。しかし、聞いているのか聞いてないのか、ニヤニヤした表情を僅かばかり本物へと近づけて唯の手を己の手で握りこむようにして押し返す。

その意図が分からないのは唯だけだ。倭の思っていることは犀臥にも分かった。だから、分からない程度に眉をしかめる。

その反応にどう勘違いしたのか唯は見当違いの事を言い始める。

「こいつら、スキンシップ多いし、うざいし、無駄に容姿整っててキラキラし過ぎだし、悪ノリもするけど、いい奴等だから仲良くしろ？」

前半半分で散々貶し、最後には命令しつつも唯はそうして笑顔を向けた。

（確かに良い奴らなんだろう。手ごわい奴らでもありそうだが）

「ああ……よろしく」

宣戦布告として犀臥は言った。

熱と氷の狭間で

「やっぱり唯は“お母さん”らしいじゃないか」

突然、犀臥が言った。

「ええ……！？何でだしッ」

咄嗟に反論すれば犀臥は何故だか綺麗な笑みを向けてくる。

ほんのり頬が熱くなって、穏やかな瞳に目を合わせていられなくなる。

「行動が、子供を窘めたり叱ったり、小言を言う感じとか、宇治たちを子ども扱いだろ？」

「っ」

なら犀臥のその眼は何だ、と言いたくなるのを必死に耐え、俯く。唯にしてみれば犀臥の眼こそ、子供に向けるような自愛に溢れたものに思える。暖かく、柔らかな視線が唯を見つめ、体温を上昇させるようだった。と同時に非常に居心地が悪くなる。

すぐそばでは倭が不機嫌に、蒼は爆笑、空は同意しているのがそれを加速させていた。

「まっかだ」

昼食後のお昼寝として唯の膝にべったりくっついていた深がくると上を向いて眼を唯に正確に合わせる。当然、赤面して俯く唯の顔なんて丸見えで、それを素直に感想にただけのことだったが、

「ッ馬鹿言っな」

唯は不満に端正な顔立ちのそれを上から押しつぶす。

「むぎゅっ」

（んなわけない。考えすぎなんだ、何を考えてるんだ、俺は）
けれど犀臥も唯に冷静なる思考へと戻す時間を与えない。

「で、俺はどうなるんだ？唯が母親なら」

「えっとお……」

（ソウはキャンキャン吠えるような犬で、委員長がツンデレ犬、シ

ンはのんびりした感じの大型犬で、倭はお高い猫。犀臥は中型剣っぽい……)

思考がずれる唯だが、その心を知るものは誰もいない。口に出せばすぐさま「そっちじゃない」と突っ込まれそうなのだが、現状においてはいない。

「空が姉さんで俺と倭が兄弟、深がわんこで、犀臥がお父さんでいんじゃない？」

「納得できませーん。俺はお母さんの愛人で」

「いや、めちゃくちや昼ドラだから、それ」

「深と倭は兄弟じゃないとダメだよ。互いに首輪繋いでるんだから」

「倭はわんこより猫だろ？」

「ちよ、不名誉なことといわないでくれない？無理だから、ネコは無理。タチ」

「何の話してるんだよ、お前」

「お家のお話」

段々と話の分かる唯は段々と硬直してゆき、頭の中が白くなる。

思考回路はこんがらがって団子になり、ショートとかいう以前の状態だ。回転は遅く、パクパクと口を無意味に開閉させるだけの時間が過ぎて、雪解けのように急激に熱された唯は赤い頬のまま、満場一致に溶けかけた雰囲気は唯は

「ちっがーうー!!」

全力で否定。クラス中の視線が突き刺さるような注目を集めながらも、そんなことは気にしていられないとばかりに言葉を重ねた。

「嫌だからなっ！俺と犀臥が夫婦なんて——」

「否定するのが妖しいんだよ。“ごっこ”遊びにムキになるなんて唯のお馬鹿ちゃん」

即座に切り捨てられて己の行動が真逆に作用したとなると答えに窮す。深までもが同意するように肯けば、唯はもう言葉も何も出なかった。立ち上がって呆然とする。

「唯」

小さく、隣から呼びかけられて、犀臥と唯の視線が絡み合う。

（それって要するに意識してるって事だろ……！？）

自身に向けて心のうちで叱咤する。

吐露された内心は酷く分かりやすい様相をしていて、呆れる自分があるのに衝動に引き摺られるように動き出した。動揺して、これまた分かりやすく後ろへ足が逃げを打つ。そのことに僅かにバランスを崩した体を、犀臥が引き寄せて事なきを得る。けれど、唯はもうだめだった。我慢できずに何が何だかわからないような自分の思考さえも見えないまま。

「悪乗りするなバカどもっ！！」

りんご状態まで発展した頬を見られないよう、俯きでその場を去る。

あてどなく、我武者羅に。頭を冷やす場所を求めて。

「唯、恋かな？」

「さあ？でも、初恋そうだね。初心でわかりやすい。何処まで知識あんのかな？」

「だから何でそっちに話を流すのかな？」

「空、実はその手の話題が苦手なだけだよ」

「唯、かわいかったよねえ。真っ赤になつて、さ」

追いかける事もない友人たちを薄情というか、それともからかった本人たちとして過剰に接触を図らないべきか。答えは出ずとも、行動は皆がすべて等しくその場に留まることとなった。

唯のそれをいつものこと、と割り切るわけではないがそれよりも重要視すべき事柄があると考えからこそ、皆がここにいる。新しく入ったクラスメイト、唯と親しくなるだろう、ひいては自分たちとも近い間柄になると予測することが容易な人物——犀臥につ

いてである。

「春か。やっと、遅い春が来たのか。俺にも来てほしい。でもなあ、ここではなあ……？」

真剣な悩みへと変化しつつある蒼。

直接的なものとはならないものも、交わされる会話の真意には犀臥も気付いた。

「搔つ攫われたね、見事に。僕らのお姫様は鈍感だからまだ気づいてなさそうだけど」

鈍感なお姫様——唯のことを搔つ攫われた、というのならば搔つ攫ったのは犀臥だ。しかし、それは意図あつてのものではなく、いや、それは言い訳だった。

犀臥は半分意図的に、意識的に絡み取ろうとしていた。唯に対する独占欲と焦がれる想いに相違はない。あるならば、それを恋情と決めつけるかどうかだ。

「俺は——好きな人がいる」

男か、女かも分からない。一回しか会ったことのない人物だ。交わした会話も決して多いとは言えない。それでも、犀臥の心にあるのはその人物だ。

（刹那——）

銀色が瞬きの間にもちらつく。

変わることはない心は、けれど動揺する。唯の笑顔が、気になって眼が離せなくなるような笑顔が思い出された。

（あの人がいる限り、俺は唯に恋する事はない。……少なくとも、もう一度会って、この感情の意味を思い知らされるまでは）

この学園に来たのは必然だ。両親がいないで、歳の離れた兄と二人で生活してきた。その兄がいなくなつて、親戚縁類もなく、進学するにはこの学校の制度を利用するほかはなかった。それに、兄の失踪の、手がかりでもある。

そんな俺に、刹那は、この学園へ来いと言ったのだ。そこには何

らかのものがある。不透明で、今はまだ何も見えないけれど、確かに繋がっている。

（また、会える）

それは確信だった。

「へえ……じゃあ、どういっつもり？」

倭の涼しげな声は、氷のような冷たさで耳に入り、心を突き刺した。

溶かす炎はあるのに、熱い想いは刹那へと向けられているのに、その氷柱のうちに入った不純物が、胸につつかえた。

熱と氷の狭間で（後書き）

暫くぶりに投稿です！

文は出来ていましたが、三月中は自粛。
地震とかがありましたもので。

エレベーターの待ち時間（前書き）

寮管登場です。

寮監じゃないことに注意。

それは寮長の仕事ですからねえ。

エレベーターの待ち時間

昼食の終わり、授業の始まるギリギリの時間帯に戻ってきた唯とは話すこともなく、移動が開始された。犀臥はすぐそばにある唯の姿を見ながら、新入生歓迎会・部活紹介の時間を終えた。一度も振り返ることなく、前を見据えていた。

放課後、近寄るクラスメイトその他に帰る作業を邪魔されて動けずにいる犀臥は助けを求めて唯を見た。けれど、世話係であるはずの彼は質問や自分のことばかり話す奴らに対して犀臥の事を託すと、犀臥にはあつかんべーをして一人、帰った。

次に倭へと視線を映せば、そちらも犀臥と同じような状態で、けれど全く別の対応で人を侍らせている。その後ろで無邪気に眠り続ける深が不思議だった。空は気づくこともなく、教室を出ようとして、「ごめん、俺は今日、委員会があるから……」と気づいた途端に言い残して去り、犀臥の希望を打ち砕く。

蒼は視線を巡らせた時点でいない。早速部活へと向かったのだろうか、運動部を見て回ると昼食時に話していたことを思い出して、しかしそれは犀臥の現状に対して損にも特にもならない無意味なことだった。

「お前ら退け。付いて来るな」

零下の視線で警戒心も露わに拒絶すると輪は緩むが囲みが解除されるわけもなく、犀臥が動くと一歩、一歩分だけ形が崩れるという具合のどうどうめくりだった。犀臥の高校生男子の平均的身長よりも随分低い連中だということが幸か不幸か、犀臥はゆっくりと歩みを進めた。

「ん？」

こちらの行動に気付いた倭の手を取る。その時に歓声のようなものが上がったが、気にする事もなく、そのまま目の前に立たせる。道がまた少し、割れる。犀臥は踏み切った。

倭の腕をつかんだまま、その横を抜け、開いた道を駆け、教室から抜け出る。突然の事ながら反応してきた倭を後につかせて、一気に加速した犀臥の最高速度で校舎から出た。

「人を巻き込まないでくれる？」

はぁ……つと息をつく様は艶やか、と言っている色気が漂っていた。

それはこの学園の生徒たちが見れば気絶でも起こしかねない、神の吐息そのものであったが、それを目撃したのはそんな生徒たちを異常と感じる、転入生の犀臥だけだ。

疲れた様子もなく、わざとらしく隣でため息をつく倭を一瞥しただけで、こちらも大して疲れた風もなく少しだけ乱れた息を整える。犀臥よりも背が高いとはいえ、その容貌は体育会系とはかけはなれた芸術家タイプの倭は体力がない、もしくは運動が得意でないと推測していたがそれは的外れだったらしい。距離にしていくらになるのかはわからないとしても追手を巻くために蛇行しつつ広大な校舎から離れるには二十分ほど疾走していた。それも犀臥の全速力だ。

「見てるだけで助けようとしなかったんだから同罪だろ。それに、案内人が逃げたからな」

（侮れない……いや、気が抜けないというべきか）

独りごちるのは走駆によって崩れた身を整えた後の倭の視線のせいだ。

それはとても昼に唯に対して向けていたものとは全く非なるもの。冷たく、感情のない瞳。他の生徒に向けられる作り笑いと煩わしげで見下したような視線ではないことには感謝するべきかもしれないが、それでも犀臥が倭にとってあまりいい印象を与えていないということは事実として変わらないらしい。

「寮までの道程なら、それほど難しい事はないと思うけど。立地は簡単だからね。居住エリアに入ればすぐわかる。……どの寮かなん

て、管理人にでも聞けばいい」

「そうだな。だが、不安要素が多い。宇治なら人除けにもなるからな」

厄介事に巻き込まれる可能性はあれど、煩わしい事にはならないだろう。

こういう目立つ人物のそばにいたとはそういうことだ。

人を寄せ付けやすく、けれど根本には拒絶するから、人は寄りにくい。対応一つで人が集まるも人が散る事もできる。その狡猾さも倭には備わっている。先ほどの対応にしてもそうだ。話しかけられて無視する奴もいれば、気まぐれに答えを返す。けれどその視線は定まっていらないように、観察するまでもなく倭は本気では誰も相手にしていなかった。

「……深、置いてきちゃったな」

その事を言われると、痛い。眠り続ける様子は誰かが起こさなければそのまま朝まで目覚めることがないようにも見えた。あのまま犀臥が連れてこなければ倭は深を起こす気でいたのか……いや、そうではないだろう。昼は唯に起こすように言われていたし、深と倭の間柄としても決して険悪なものではない。

だが、だからと言って倭が深を起こすなどという親切心に溢れた行動を取るかというのははなはだ疑問だ。倭の性格は一見して、人当たりがよい。けれど底の見えない笑顔は人を不用意には近づかせない。はつきり言って、犀臥は倭が信用できない。

倭は腹黒というような人物ではない。単に不審なのだ。まったくもって怪しい。笑顔の裏で何を考えているのか、思考を、表情を、他人に読み取らせない。

「行くよ」

「はい、寮管。新しい子、連れてきましたよ」

結論から言おう。寮につくまでに視線は多く絡みついたが、それが近寄るといふ行為にまで発展することはなかった。それははつき

り言つて、他人と馴れ合うことが嫌い、特にああいう奴らは“うざい”と感じる犀臥からすれば正しかった選択だった。とても、心地よい空間とは言い難かったが、それでも一人で来るより良かった。（例外は唯と一緒にいる時だ）

一匹狼を気取つてゐるわけでも、孤高ぶるナルシストでもないが人に詮索されたくない過去があるだけに、犀臥は一人でいるのが一番心落ち着く。けれど、唯は特別だった。

唯の周りではいつも、穏やかで、優しい空間がある。嫉妬や羨望欲に塗れた奴らのドロドロとした空気が唯によつて清浄になるようだった。

倭は呼び出しのための鈴型チャイムを鳴らすか否かのタイミングで扉を開けた。

「ありゃ、お邪魔でした？」

寮入り口に設置された寮管室には要述べの為の受け口がある。学生以外の職員が寮管として請け負うとはいえ、常時その場にいることが現実的に無理だということで、受付にいない場合の呼び出しにチャイムが置かれている。しかし倭は不在の確認もせずに、扉を開け広げ、――犀臥にとっては見たくない物を、いや大抵の人が見たくないような場面を、目撃した。

学園内では既に常識化しつつある、情事。――最中でなかったことに感謝すべきか、否か。

その事後と明確に分かるような室内の様子に犀臥は視線を逸らした。頭を抱えて現実逃避したくなるほどの衝撃で、いや衝撃的だったからこそ目撃するという現実的な事象に対処できずに眼を逸らすだけで脳内から消去しようとした。他二人もそれについては優しく対処してくれているようで寮管と呼ばれた人物は眼鏡顔に、笑みを貼り付けてにこやかに接してくる。倭も口に出して何か言うわけもなく、普段通り口元を歪ませている。

「陽汐 ひがし 犀臥 ひがし だね。手、出して」

手を出すのを微妙に躊躇った。真面目に潔癖症なのかどうかを自

問自答した。

犀臥の行動を見守るような視線がぐさぐさ刺さる。

（スルーはわざとかよ……）

犀臥よりも背の高い二人に見下ろされる現状。——試されている。

「承認終了。はい、鍵。次学期になったら部屋移れるようになるから。じゃ」

渋々伸ばした犀臥の手の下、すつと紙が差し込まれ、ついでに朱肉も登場した。最初から二つを用意すればこの次にやるのは指判だとわかるのに、それをせずに手を出すように指示したものだから犀臥も疑った。直前の光景を見た後、素直に手を出す者は少ないだろう。いやでもその手に注目するはずだ。そして自分に触れるのかどうか。

（まったく、憎々しいね）

倭が寮管の立場ならば同じようにするだろうことがわかっていただけに、ニコニコと笑うその人物に覚えるものがある。彼も腹に一物含んでいる。そんなことはこのやり取りでも分かることなのに、初対面時から常備されているその笑顔はそれとわかるような愛想笑いではないので、苦笑する。己の浮かべる笑みが誰でも分かるような作り物なのだから、比較してしまう。（もっとも、同じようになりたいと思うわけではないけれど）

言うが早いのか、会話は強制的に終了させられた。扉を閉じる動作は素早く、誰にも抗議させないほどの強さで行われた。

倭は中にいるもう一人の人物がこの学校の、しかもこの寮の生徒だと知っている。二人の仲は恋人として有名というべきか、公言されているというべきかという感じなのだ。

恋人のあられもない姿を見せるわけには行かないという独占欲よりも早く恋人のもとへと行きたい、というような行動だったがために、ならば犀臥を試して延長なんてしなればよかったのに、と思う。自分が恋人を持ったらあんな感じになるのだろうか——寮管と

己を見比べてみる。咄嗟に思い浮かぶ傍らの人物は、唯。

「唯の部屋、ね……」

倭は呟きを口の中に残した。

わかつていたが、羨ましいという気持ちは変わらなかった。

唯に対する周囲の態度は十分把握している。その上で、倭は唯と共にいる。それが不利益を生むとしても、離れるつもりはなかった。唯は決して己から他者と距離を置くような正確にない。だから、倭はそれに甘える。そのことで唯に何らかの不都合を与えてとしても、不幸にするとしても、そのつもりだ。

（最初は、興味だけのつもりだったんだけどなあ……）

興味から好意へと変わるのに、そう時間は掛からなかった。

しかし、同時にそれは、深や空たちにも言えることだった。勿論、犀臥にも。

「宇治、あれって……普通なのか？」

まわり着く視線が鬱陶しい。それでも明確に拒絶することはせずに、ただ存在を否定する。それだけで声をかけるものも、近寄るものも、いなくなる。すんなりとエレベーターホールまで行き、ボタンを押してから到着を待つ。

「普通だと思っよ？」

見られているとわかってても平然とにやんにやし続ける根性を持つ者はそんなに多くはいないだろうが、そういう奴らと縁を結ぶことになるだろう犀臥にはこれぐらいのことに動揺してはいるこの先やっていけないだろう。

（何せ、この容姿だものね）

明らかに、そのらの美系とは一線を画したところにあるその質は、この学園一厄介事に既に首を突っ込んでいる。第二の厄介事——“生徒会”も食いついてくるのは必至だ。自覚なく、犀臥はこの学園に影響をもたらしている。それも今日一日で、だ。

「ねえ。唯のこと、どう思ってるの」

最上階、18階まで表示の施されたエレベーターは寮内に設置されたものの中で比較的に利用度の高いものだ。各階に止まるそれは職員用のものや、特別生徒待遇のものといった種類のエレベーターは鍵とパスコードがなければ動かない。最上階、理事長室へは一般生徒も立ち寄れるようにと、寮管で申請すれば鍵とパスをもらえるようになっていた。

居住区エリアの中にある寮は合計で六棟、幾つにも分岐されている為にその一つ一つの規模はそれほど大きくはない。内包している部屋数も少なく、けれど代わりというように部屋の一つ一つは大きく、利便性があつた。

エレベーターは随分上の方から降りてくるようだ。まだ、到着することはない。

（この待ち時間がなければ本当に、いいんだけど）

「唯が気に入ってるから」

振り向いた視線の先、犀臥は表情の読めない顔で立っていた。視線は絡み合うのに、どこか合っていない。

「譲る気はないよ。誰にも」

（どうせ、監視がついてる。聞かれてるに決まってるんだ、だから）それはもう一人へと含めた、倭の宣言だった。

湯気が立ち上る景色

通常人では視認で着ない距離を見つめてきた黒い瞳に、囚われそうだった。

気配を読むよりも先に勘が働いたような、そんなタイミングで犀臥は気づいた。

そのことに唯は、感心する。やはり、と認識を深めた。

（恐ろしいほどの才能が、眠っているのだろう、この男には）

潜在能力は未知数。——唯の知る人物に、よく酷似した才能はやはり、血縁と呼ぶのだろう。

そして、震える。その事実が示す結果に。

だから、唯は考える。

一日を終えた、寮の自室で、さいがのいない内に考えを纏める。

一般的なことは説明を終え、そして実際の体験も終えた編入初日。けれど、一つだけ話していないことがあった。そしてそれが一番重要でもある。

“裏”——朝日学園が大都会にありながら隔離されるように周囲の建物からも駅からも離れて設立されている訳。学生が全て寮に入ることを原則とされている訳。

“能力者”という日陰者を保護する為だ。前近代に発見された種別“能力者”は社会的に確立されてきたとはいえ、差別の対象になる。世論は“崇拜”“利用”“下等”の三論を展開し、今をもって平凡なる生活を送ることは難しい。

“崇拜”は進化した人類、と本人の意思も関係せずに擁護し、けれどその本心は怖れと宗教戦争の引き金だ。“利用”は能力の活用として兵士に仕立て上げようとする者。軍事利用の観点は国家にも及び始めている。それも半ば強制的な国でさえ少なくない。“下等

”は利用する者たちよりも厄介だった。飼い殺し。人として認めず、その命を軽く見、そして怖れから断罪を望む。——人工的能力発生を促す存在がいることも忘れずに。

幼い時分は能力の制御が完璧ではない。成長とともに使い方を覚えるが、それまでは“通常人”は怯えなければならぬ。制御が完璧でも、人格的な問題がゼロとは言えない。危険な存在の排除を願う。——そんな者たちの犠牲にならないよう、能力者の保護団体として、朝日学園はその地位を確立していた。学生という期間のみの切り札だが、三種に分かれた立場のどれでもなく、能力と人格の教育という立場でいる朝日グループ。能力者の発見初期からあるために組織として大きな影響力を持つが、少数派だけに決して不動というわけにも行かない。

海外にも輪を広げる朝日グループは表向き、日本屈指の中高イレベーター式進学校として名を馳せ、その裏では能力者という条件に途中編入も認める学校だった。それが、“例外”として適用される。勿論、表の面がある限り通常人の受け入れもしている。だが、それは能力者に対する危険思想を持たないことを確認の上での、実質的には学生でさえ“裏側”を知っている状態での入学だった。能力者は過程として能力制御の授業があるのでどうしても知らないというわけにもいかないわけだが。能力制御——国家に隷属する軍人でなく、傭兵という立場に置き換えるための訓練である。人間的地位の向上を目的としたものだ。

カリキュラム上で表裏が別れる学生たちの生活は、そのため区別される。能力者は放課後の“部活動”という形や“委員会”という形で時間を取る。そのさり気なさには生徒たちには表立って誰が裏で誰が表かわからないだろう。

けれど、極近しい人物というのは個人的に特定が出来てしまう為、そのため“表”と“裏”の両方に属する者たちの派閥が出来る。白と灰と黒。そんな、社会の情勢をそのままにしたような派閥が学内

で出来上がる。それが、現実だった。

そして、犀臥は圧倒的に“裏”だ。

やはり、その容姿において注目されるさいがは表に感づかれやすい存在でもある。“裏”という隠匿に対し、目立ちすぎている。編入生が一日で見せた数々のこと。頭脳明晰、容姿端麗、スポーツ万能。人格にも問題がないと来れば、一躍有名にもなるだろう。

当たり前のことだが、それでは“裏”に対して、大きく反感を持つ材料となる。

（裏で影響力の大きい人物の保護下に入らないと）

でないと、早々に問題が浮かぶだろう。

容姿に重きを置く傾向の表に比べ、裏は能力・実力重視だ。

「シン……いや、倭かな」

リビングに元から設置されているソファ。それに横たわり、見るともなしにつけばなしのテレビにむけて言った。

「部屋に呼ぶのか？」

背後からの声に、顔だけ向ける。

湯上り姿で迎えた犀臥は部屋に先に唯がいたことへの驚きはなかったが、その室内の様相には驚いていた。思った以上に広く、各種設備が整えられていたからだろう。

自室に浸かっている部屋の扉の隣を示すと荷物を置いてすぐに出てきたかのように、すぐさま部屋を物色し始めた犀臥に、先ずはお風呂でも入って落ち着いたらどうかと提案したのだ。

何せ、制服から着替えずに色々とし始めるので皺が出来る。いっそ風呂に入れば服も室内着に変えるだろうということだった。

「出てきたんだ、早いな」

短髪を白い真新しいタオルで包みながら近づく犀臥に唯はのんびりと言葉を返した。直前まで身を横たえていたソファに座り直して、テレビを消した。

テーブルの上には散らばったままの教科書類。広げられただけで

書き足されることもなく真白なままのプリントは、気が向かなく進めることを断念したものだった。

「まあな。それより――」

「食事、食いに行くだろ。その時に話でも、ってだけ」

「食事？自室じゃないのか」

その疑問を持つのも当然だろう、個人部屋にはそれぞれキッチンも冷蔵庫も完備だ。二重の設備は快適を追及したものだが、その分だけ金も手間も掛かっている。それも、これだけに限らず、風呂にしてもシャワー室が各部屋設置のほか寮施設として大浴場がある。利用するものは少ないけれど。

「寮食は六時から二十四時の間、ずっと営業だからね。具合が悪い時とかはルームサービスもできるようになってる」

部屋に固定された子機を指す。お粥などの病院食も注文できて、その料理の品幅は広い。

それに、今日は寮生歓迎会だ。

さつさと着替えるよ、風引くぞ。そう、促して絶えてしまった思考から別の問題、目前に広げられた宿題という名の問題を片付け始めた。

ピンポン

「お迎えご苦労！」

「いえいえ、それほどでも？して、ご褒美は？」

「ええい、無礼者――！触れるでないっ！このセクハラ魔！」

「それ、現代じゃん」

「スケさん、カクさん？」

「いや、違うから。悪役だからね、その二人」

唯の言葉に端を成した流れるような会話についていけず犀臥は突っ立つ。そこにあるのはいつもの四人の姿だ。

「何やってんだよ、お前ら……」

呆れた風に言ってもそれは逆効果だった。

「おお、つつこみが増えた」

「増えた！」

「良かった。ほんとうに良かった……！」

実感の籠る声に、この途方もないボケの渦に一人立たされていた空が可哀想だと思った。

湯気が立ち上る景色（後書き）

何気にお色気犀臥。本人たちは自覚無し。

さっさと服着ようよ、犀臥。目もあてられないッス。

符合は不一致のまま

「デカ……ッ！」

一目で感嘆を覚える、その場所を下から上へと目線を滑らして広さを実感する。ずらりと並んだ長テーブルの置かれている前列。数人ごとに集まるのにちょうどいい丸テーブルが点在する後ろ半分。煌々と照らされる場内は小さなシャンデリアと、それに合わされたような細工に凝った作りの照明。壁には品のいいタペストリーとどこかの有名画家にでも書かれたかのような美しい風景画。贅を尽くされた内装とわかるのに、良くありがちな派手派手しさも作品同士が美点を打ち消しあうこともなく、その空間は存在していた。

（これが、一介の学生食堂なのか……！？）

まるで別世界。

これは貴族の屋敷か、宮廷の一室か。

しかし、現実には己の転入した学校の寮内施設、しかも食堂である。

圧倒され、言葉も出なくなる犀臥に、けれど学生たちは平然と過ごす。そう、犀臥の隣にいる唯たちも、それを当たり前のようになっている。

「そりゃ、ね。うちの学校お自慢ですから」

「こんな時じゃなきゃ席埋まんないのにさあー、もったいな」

さつさと席取るうぜ、と促す蒼のもと続く。席を確保するのにもこの友人たちの容姿は通用するようで、人ごみを掻き分ける普段とは逆に席が丸々と譲られる。希望者が多く、そちらの方がごたつくほど、速やかに人は撤去した。移動に際して口々に声かけをしているのが厄介で目障りだ、と心にそつと呟く犀臥だったが、その中で唯は特別だった。

囲まれる中で唯だけがポツンと立って苦笑しているのが目に焼きつく。何故——という言葉が出る前にその声は聞こえてきた。

「ちよつと、退きなよ」

退け、という前から体当たりしてくるのに言葉を投げる必要があるのかと唯は思ったがふらついた姿勢を立て直して前を見れば、まあわかつていたことだが相手の用向きは道を退いてほしいということとでなく、唯へのやつかみだった。

「君みたいなのがこんなところにいるんじゃない。君には君に相応しいところがあるんじゃない?——台所で食器でも洗ってたら、貧乏人」

最初に声をかけてきたらしき生徒の次の言葉にその友人、もしくは取り巻きが笑い声を上げる。クスクスという笑い方はその可愛らしい容姿には似合っている。けれどその性別を考えんとすれば、の話であつて甲高い声は唯にとって可愛らしいと寛容に構えることのできるものではなかった。眉をしかめ表情を曇らせる唯に自らの発言に対して気分を害したと相手方は納得したようだったが。

「あ、でも給仕は止めてよね。君みたいな庶民が運んだものなんて不味くなる」

「僕らの食事掠め取りそうだしー?」

満足げに笑いあう彼らに、唯は呆れた。

この程度のことは日常茶飯事であつてたいした問題ではない。言われる内容も定番で、代わり映えのないもの。それに一々傷付くことはないし、気にすることもない。

問題は、こちらに視線を固定している人物がいたことだった。

軽く、誰にもわからないようにそつと息をついた。

「お前ら——ッ!」

群がる生徒たちへの対応に唯のことまで気が回っていなかったはずの犀臥は、けれど猛然とした勢いでこちらに、正確には唯を罵倒した生徒たちの目前へと来て、その怒りをぶつけようと低く声を発する。それに歯止めをかけたのは、中心人物である唯だった。

唯は湧き上がる怒りに前に出ようと暴拳に動いた犀臥の肩へと手を置き、止める。

「――落ちつけ」

その落ち着いた声に沸騰しそうになった頭がスツと熱の下がるように冷えていった。

心なしか、空気も熱気から遠ざかる。

「お前が怒る必要ないだろ？ 犀臥って変！」

なあ！とわざとらしく明るい声を上げて唯は同意を求めた。いつの間にか犀臥のそばには生徒たちではなく、蒼たちがいる。

「あつちに席あるから移動しようぜ」

何事もなかったかのように声をかける蒼に不審を感じたが、誰も何も言わず、沈黙が落ちていた。食堂はいつからこんなに静かになったのだろうか。

「おっ！ たまには気がきくんだな、ソウ」

パツと犀臥から手を放した唯が今度は蒼の背を叩く。笑顔だ。

標準通りの、笑顔。唯は始終笑っていた。――何故。

犀臥には分からない。今日着たばかりの、今日会ったばかりの犀臥には、わからない。

「たまにじゃないし！ ほら、何やってんだ二人は！ 起きろ！」

蒼が長机に突つ伏す倭と深の頭を順々に叩いて起こせば不満が口を出た。

「イタツ！ 何すんのさあ。暴力反対、横暴王子」

「ううう……っ！ 起きるから、起きるから、もう叩かないで……ぐう」

「夢の中でまで叩かれてるの、深」

生徒たちに断りを入れつつ空席を確保した空は早速寝に入っていた深と倭の様子に呆れ苦笑した。常識人であるはずの空までもがいつも通り。

そのことに、犀臥は胸がざわついた。

（黙認してる？――なんでだ、こいつらは唯のことが好きなのはな

のに。どうして)

傍目から見ても、彼らが唯に対するこの周囲の態度に納得するようには思えない。それほど彼らの絆は薄くも脆くもない。

それならば現状として示されているこの結果は何なのか。

しぶしぶ起きた倭とうつらうつらとしたままの深の背を押して空の案内に従い席を移動してゆく唯の背を見送る。犀臥もそれに続くとして――蒼が未だ静かな生徒たちへと目を向けるのを、見た。

「――」

何の感情も籠らない様な視線は一瞬だけで、すぐさま苦笑のようなものに紛れた。その一瞬後には生徒たちの硬直も取れ、すっかりと雰囲気を取り戻す。

けれどそれは、蒼の、好青年とした様子からはかけ離れた冷たい眼差しだった。

そのことに犀臥は身体が、思考が停止した。

「ん？犀臥、何してんだよ。来いよ」

振り返った唯の笑顔に、その違和感を感じ取りつつも、犀臥は従った。

七人がけの丸テーブルに六人で座る頃には食堂に集まった生徒たちもそれぞれ席に着き終わっていた。寮生歓迎会が始まる。

一滴の感情落ちて

「唯、さっきの——」

「さっきの、何？」

濁る言葉に先を言わず唯は問い返した。

「今さっき、感情が爆発しそうになって、でも、俺、制御できなくて……でも、お前が肩叩いてすぐさま落ち着いたんだ」

自身でも把握していないそれは、確かに犀臥の“能力”だ。

犀臥がここに編入できた理由、能力者としての素質やこの学校の“裏”の役割のことも、犀臥は知らない。本人以外のところで広まる情報は既に今回のことで確定的になったのだろう。歓迎会と名をうったこの場所でも周囲に眼を走らせれば犀臥に向かう視線の中に憧憬などから来るものとは別格のものが複数、ある。——唯は“裏”の人間だということが広く知られているように、知れ渡ってしまった犀臥の存在に監視の目がついた。

（できれば、犀臥には唯が裏の人間だと、知られなくなかったんだけど……）

最初から無理というものだ。

「俺ってリラックス効果あるのねー。即座に効果てき面じゃん」

カラカラと笑って誤魔化そうにも、犀臥は抜け目ない。

助けを出してくれそうな人物がいまは傍にいない。裏の人間である倭、深。そして表でありながら唯の意図を酌んでくれる空、蒼。いつものメンバーは珍しく、唯の傍からはなれ、それぞれの交友関係に絆を深めている。

「お前が、何かやったんじゃないかって、思った」

それは裏の世界に通じているものならばすぐさまわかるような変化だった。

室温の変化、温度。——犀臥の感情によって発露した能力の欠片

は初原的なものであり、協力にしてそれまでに発見された能力の中で希少なものであった。

“熱量変化”——その能力は空気中の水分子の密度を変える。蒸発、水蒸気、氷。そんな水系の能力に限らず、熟達すれば炎の発火も行える、利便性の高い能力だ。

出現から現在までの飛躍した能力者への認識。それに一躍買っているのがこの能力だった。今までにこの能力を持つ者は二人しか発見されていない。

（代表的でありながら希少な能力。その使い手に、犀臥は選ばれた）

けれど、その希少さで問うならば唯はたった一人の能力者だ。

「知らないよ。何も。何がいたいのかも、わかんねえ」

唯の能力は希少というよりも、唯以外に存在しない能力だ。そしてその事情を知るものはそれほど多くない。公に出来ない。

「あれが何なのか——お前なら、わかる気がした」

「何か……？なんで、俺？」

どこか熱っぽい視線に、唯は視線を逸らす。魅力的な黒の瞳が訴える力に、抗う術を唯は持たないから。——話せない。話せない。話せない。

「……わからないよ俺には、お前の気持ちなんて。俺とお前は、違うんだから……」

（根本的に、決定的に違う。存在も育ちも、何もかも……）

唯は心の内に拒絶を繰り返しながら無意識にピアスを触っていた。

揶揄と毒舌の誘い

「あつれ〜？もしかして、噂のイケメンくんじゃね、アレ」

全く空気を読まないような聞き覚えのある声が二人の間に響いたかと思えば、姿まで割り入ってくる。今回はそれに救われた。どれも見覚えのある顔で、けれど久しぶりに見る三人組の先輩。その内の一人が唯に声をかけた。

「最近見かけないと思ったらずっとココにいたのか、有島」

「——イツテ先輩」

三人のうちでまとめ役ともいえるイツテはそれほど多弁ではないし、だからといって寡黙ではない。厳しい雰囲気なのは顔立ちの精悍さだけでなく性情だ。優しい、とは思わないが唯に対して銜いもなく声をかける珍しい人物である。

「何、落ちこぼれ君は編入生とイチチャついてて先輩たちには挨拶なしですか？」

次に声をかけてきたのは丁寧語に毒舌を加えるヤタキ。

最初に唯と犀臥の間に言葉を落とした先輩であるトウジはウィンクしては周囲へと観察の眼を巡らせる。——十中八九、犀臥の能力についての監視者だったろう、三人組は唯を出しに近づいてきた。話題もそれ寄りになる。

「“落ちこぼれ”？」

犀臥が妙に言葉に反応した。疑問の形を成していない聞き返しはトウジに拾われた。

「編入生くん、何にも知らないんだ？唯ちゃんは自分から言つのが嫌だったのかなあ〜？」

（余計なことを……）

唯は顔を歪め、きゅっと手を握った。ヤタキ曰く、その表情が気

に入ってるらしく、わざと毎回“おちこぼれ”という。普段なら不快に思うこともなく、またかと呆れた風に受け取るのだが、今回は違う。タイミング良く接触して犀臥からの詰問を逃れたというのに、新たに問題が浮き上がっただけとなった。

「かかりつきりになってるのは本当と言うほどじゃありませんが、世話係なんで」

小さく否定をして、話を逸らそうとする。

唯は異端であって、だから能力が使えない。そして“おちこぼれ”だ。そしてそれはこの“裏”を持つ学校の中では、弱者と同義。弱ければ、それなりの対応をされる。実際、それだけの話なのだ。唯に対する態度なんてものは。結果が残せなければ意味がない。

犀臥がふいに唯の手を握った。そして強引にその場を離れようと踏み出したその時。

「君さ、陽汐……だったよね。あっちいつててよ。赤んぼ相手じゃ、話進まないから」

明らかな揶揄はヤタキ独特の毒舌だ。犀臥の足は当然のように止まる。

初心者、事情に明るくないということを生まれたての赤ん坊に例えたのだ。しかし、それを言われて平常心で受け止められる者はそう多くない。多分に漏れず、犀臥は不愉快に表情を歪めた。そしてもう一つ。唯が気づかないでいる、犀臥を不快にさせる要素。

「あ、でも唯くん置いてってよ？おしゃべり楽しんでるんだから、無粋でしょ、君。だから今日は、——見逃してあげる」

トウジが唯の腰へと手を回し、囲む。長身のその姿と唯は非常に“似合って”見えたのだ。唯が反論もせず成すがままになっていることにも苛つきが増す。——独占欲だ。

「犀臥。……ちよつと離れてて。すぐ終わるから」

「そんなに睨んでも意味ないしい？」そんな軽口が聞えそうな気配に犀臥は背を向けた。

「ルール違反……」

裏を知らない者に裏を匂わせる。それは禁句だ。

小さく呟きを残す唯にイツテは軽く苦笑した。

「これぐらい流せ。どうせ入るんだから問題ない。こちらの要求としても早急に来てほしいという事だからな」

「即戦力になりそうだよな。あれ」

犀臥の背を見て呟くヤタキに溜息をつきたくなった。トウジまで加勢して煽ってどうするのか。イツテが心配性なのは唯も知っていることだった。今回のことも最近見かけなかった唯に対する配慮、そして長く場を空けた後の負担、その外諸々の事によるものなのだろう。しかし、

「先輩。わざとでしょう」

「タイミングが重なっただけの事だ。どちらにせよ、同じだからな」

「状況は悪化したように思えるんですが」

「それに——まだ、犀臥は落ち着いてない」

この環境下で、この慣れない学園に戸惑う犀臥には早すぎると思った。

精神的に強いものはここでは強者だ。しかし、それは逆に揺さぶられやすいともいえる。

そして犀臥はそれに当てはまる。強い心は簡単に温度を変える。

今は唯の能力で犀臥の発動を抑えたが次もそう上手くいくとは限らない。

——唯の能力“存在率変容”

『世界を世界であるように変える』それが基本理念の能力は存在率・発動率、現象としての“ありえる可能性”を操作するものだ。

限定的な使用制限は能力に対する能力でしか発動できない。加えて接触による媒介が必要だった。

（能力者の天敵ともいえる能力）

無効化とはまた別種のものだがよく似た効果を持つ、発動をなか

ったことにしまえる能力。犀臥の能力の片鱗を鎮めたのもそれによるものだ。能力に引きずられて精神的にも落ち着いたようだったのは、取りも直さず心と能力の直結を現す。

「長引かせることはお前にも負担になる」

「ええ……」

恐ろしいほどの可能性を秘めた犀臥には早急に制御を覚えてもらわなければならない。

今、外に、表の生徒たちにそれが知られたら——能力者に対する紛糾は再加熱する。

（今更の話だ。分かっていた……あの人の、弟なんだから）

唯の良く知る人物の面影が犀臥に重なる。よく似た兄弟は、その能力まで同じだった。

「彼、随分君にご執心のようだね」

「そう、ですかね……」

「そう」

ヤタキの切れ長の瞳に言われ、唯に複雑な思いが過ぎる。

友人としてか、犀臥個人に対するものか、……兄を思い出させるからか。

「面白い展開になってるね唯くんと彼」

「——かき乱すなよ」

「あの人が知ったら、どうなるかな」

イツテの忠告が効いたかどうか、それはその表情を見れば一目瞭然だったがそれ以上は誰も何も言わず、ただ黙す。

やがて唯は沈黙の内に頷いた。

「……わかりました。後で連れて行ってもらいます」

「お前は？」

イツテの問いかけに含まれたものが何であるか、唯はすぐに察した。一瞬判断に迷い、けれどその意図とは逆に、否定する。

「……一緒には、会わない方がいいと思いますので」

犀臥が会わなければならない人物。それはこの学校の中ではもつとも影響力の強いと言われている人物であり、また唯にもつとも縁深い人物でもあった。

だからこそ予感する。唯が犀臥とともに行けば初対面のその場は崩される。

唯とあつてからの犀臥は悉く、それまでとは正反対に熱い。事前調査にあつた、犀臥本来の冷たく研ぎ澄まされた部分が全く見えて来ない。このままでは“才能”が潰れる。

それは避けたい出来事だ。そして回避するには現実を見せるしかない。

（すぐそこにある現実には、気づかないものは多い。けれど、裏はそうは行かない）

誰もが見るはめになる、現実。能力者というものの、社会。

犀臥の能力はそんな現在に一刃食い込ませることの出来るもの。

それは最大にして最強の諸刃の剣。
すぐ傍に来ていた倭に視線をやれば意図を酌んだのか、肩をすくめる。

「……はいはい、わかってます」

肯定に頷いて倭は人に囲まれ不機嫌を晒して立食していた犀臥の背を掴み、引き摺ってゆく。

「犀臥、行くよ」

「どこに？」

それには誰も答えず、歓迎会から主役が消えていった。

鬼門という名の孤独の王

「……変な空気、気づいてるでしょ」

静かな空間に倭は放った。

「あれ、唯なんだよね」

普通ならクラスでもムードメーカーとして人気者になりそうな唯。しかし実際は違う。空が牽制して、蒼が取り成している空間は唯とクラスメイトとの亀裂。

犀臥の知る唯はおちこぼれではない。寧ろ平均的を少し上回る能力で何事もそつなくこなす。そんな唯に対する周囲の態度は友人に美形がいるからというものでは収まりきれない、何らかのものを感じていた。——“おちこぼれ” 犀臥は先ほど聞いた言葉を反芻する。けれど見えない道へと入り込んだ思考は出口を見つけられずにくた。

その答えの先、それを倭は犀臥に教えようとしていた。

「唯は、大変な人に気に入られちゃってるからね。嫉妬とか、そんなドロドロ」

もちろん俺らといるだけでも十分に買っけど、と付け足す。それには苦笑が乗せられていて、そのことを意外に思った。しかし、倭の唯への執着ぶりからすればそれほどおかしくもないのかもしれないな、と思い直した。

基本的に倭は誰が傷ついても己の興味の範疇外ならば黙って見過ごす。それが例え友人や、己自身のことにしても、変わらないスタンス。唯に対する誹謗中傷、悪態についても何ら文句もなかった。しかしそれは最初の方だけで、すぐさま気に食わなく、そして改善の使用のない者だと気づかされた。

思えば倭が興味を持ったのはそんな唯の態度からだ。いつも時を過ごす五人の中で倭はもっとも遅く唯との係わりを持った。

始めは蒼が仲良くなり、やつかみを受ける唯に空が中立的な立場から次第に私情として仲良くなっていた。そしてどうやって知り合ったのか、深が懐いた。そんな風にして孤立していた状況から変わってゆく表で、けれど裏は変わることなく底辺として扱われていた。“あの人”に興味をもたれたことからその不幸は始まっていたと言っている。

「俺でも齒向かえない人に、唯は立ち向かったから」

悪い意味ではない。それでも、唯が悪とされてしまうのは何故だろう。

圧倒的に、唯だけが悪くされる。

あの人は何事にも無関心で、だから唯が特別であることに、誰もが眉を顰める。おちこぼれ——唯に向けられた牙だ。

「唯は不干涉、不触の存在として、学校中に認識されている。——それって俺は好都合だと思うけど、唯は、どう思うだろうね？」

自分ならば、そんな孤独を愛すだろう。

そんな孤独が時に恋しくなる夜がある。人目を憚ることのない存在でいたいとどんなに思ったか。自分の容姿を呪うのに、それを利用して自分が酷く汚らわしくて、他人よりも自分が鬱陶しく感じられた世界に、唯はただ一人、孤独に泣いていた。

孤独に立たされても立たされても、その本来の輝きが周囲を虜にし、——それでも孤独を拭わないのは何故か。闇が光について回るの同等に、太陽のような唯の笑顔にはいつでも闇が覗いていた。……それが窺えなくなっただのは、隠れて見えなくなっただのはいつからのことだろう。

「でもさ、それもあの人の目の届く範囲内で、あの人の許容範囲内でのこと。……嫌がらせなんてあの人は知っていても、“お気に入り”が傷ついても、壊れない限りは許容する。自分のものであれば、その独占欲に引っかからない限りは逆に安全に手出しが出来るというところもある」

あの人は、わざと唯に孤独を造っているような気がしてならない。

それでも、倭はあの人が嫌いになれない。尊敬の眼を変えられない。

なぜなら、あの人は唯のことを一番深く、理解しているから。

ここ数時間の接触の中で分かった事がある。

倭は好き嫌いが激しい。そして、興味のある事以外には食指の動かない性質であるためか熱しやすく冷めやすいともいえる。そしてその興味の大抵が唯に絞られているということだ。

唯の話題はいろんな意味で鬼門なのだ、多くの生徒にとって。

倭の言葉には、唯を語るのに、悲しみが見えた。唯に興味以上の感情を持つといった倭は確かに深い情が見えた。それは恋とか愛とかに分類されるものだ。

しかし、倭の見せるものはそれよりも悲しみの念が多い。何故、好きなのに嬉しさよりも悲しさの方が前面に出るのか。好きだという言葉に悲しみが宿るのか。

犀臥は唯のことを、よく、知らないと実感させられた。

「さあ、着いた着いた。気合入れて置いたらいいとおもっな〜」

ニヤニヤ笑いを装備した倭は荘厳な扉の前で促した。

それは理事長室の扉と同じく重量感に溢れ、頑丈さが前面に出ながら高級さを醸す。金の出で立ちに圧倒されながらも犀臥はその扉の奥にある気配を感じていた。

慎重に、扉を開き、中に入った。

立っているだけでひれ伏したくなる、威圧感。

初めて感じる、恐怖だった。

駆け引きは利用と統制

振り向いた先、見えた少年。

年の変わらない彼、その瞳を見て眼を反らしたくなった。

純粋な色は深く傷付いた心を表すように漆黒。斑さえなくすべて塗りつぶされた、酷く平坦な黒。でも底深い。——昔の自分を見ているようだった。

治ったと思った傷はじわじわと後になって痛み、膿み、修復の不可能なところまで子に後自覚できない。治ったと信じきっているのだ、痛みに気付かないフリをしている。

ボロボロになって、初めて分かる。

それでも、“弱さ”なんて出せなくなってしまうていた。諦めに似た感覚で、ただ受け入れ、救いや希望を見出せずにいた。唯一の光など、探すことも止めてしまつて。

暗闇の底。助けてくれる人も、抜け出す手段もなく、結局俺は底に落ち着いた。何も変わらないのだと、知った。

その頃の俺を髣髴とさせる姿。——声をかけざるを得なかった。

絶望に沈む夕陽のように感じられた。

艶やかな髪が軽やかに風に靡き、柔らかくさらりとした綺麗な軌跡を描く。

闇の中でもはつきりと存在を感じられるほどに輝きを放つのに、それでも己を闇と同化させようとかき消そうとする。

漆黒は平坦な、無感動の瞳。鋭さは消え、精彩が失われている。停滞しているかのような、鈍重な空気が取り巻く。無気力、拒絶。

かけた声にもものろのろと顔を動かすのみで、何も映さない瞳。表情は強張って、固まっている。それが、一瞬だけ、驚いたように眼が開かれた。その眼に合わさった時、何よりも先に“同類”と感じた。そして安堵する。

瞬きの間に瞳の中の感情は消え、のっぺりとした黒に戻る。
それはまるで、俺の汚い思いを感じ取ったかのように視線を外し、
立ち止まった足を動かし、去った。

——ホント、さいてー。

自嘲した。

傷付いてるやつを見て、悲しんでる奴を見て、堕ち行く奴を見て、
喜ぶなんて。

そんな自分が最低だ。

それに、俺なんかと同じじゃない。そんなところまで、堕ちきつ
てはいない。心の中で、灯りを無くして迷っているだけだ。……ま
だ、間に合う。光は消えてなんていないだから、だから諦める必要
なんてない。この先、光を見失わなければ、君を見つけてくれる人
がいる。必ず、表れる。

聞えないと分かっている、もう一度繰り返した。

「後悔をするなら、力を求めるなら朝日学園に来ればいい」

あの場所は——闇に魅入られた者を助ける。

逆に闇へと深く陥らせる。そういう場の展開がなされている。だ
ってあそこは、安全の地。そして戦場でもあるから。

選択するのなら、俺は教えよう。力を求めるのなら、その得方を。
その先を見せてあげよう。

必要なだけの力を、求めるだけの力を。

でも、決して復讐には使わないで。それは守る力だから。
だから問おう。

「お前は——」

そう、これが始まりだった。俺にとっても、君にとっても。

——俺と同じになんて、させたくない、から。

そんな懐古から逃げて眼にしたのは、漆黒だった。

「有島唯」

ふと耳に入る声は心地よい音だった。

低い背丈の少年——いや、実際には唯よりも一つほど年上の“先輩”だった。

「話がある」

誰もが口をそろえて可愛いと表現するだろうその容姿に鋭い知性を覗かせた姿は唯には綺麗と思える。周囲にそう思われていないのが不思議なぐらいに、その雰囲気も洗練されている。

馴染みある人物との関係性は複雑だ。親しい、というのは全く別の次元にあるだろうその間柄は損得に塗れている。

「行つてて」

歓迎会の終了後、皆が流れにそつて帰り道を歩く中呼びかけられた声に唯は空たちを促して部屋に帰らせてから警戒することもなく振り返った。

「お久しぶりです、先輩」

につこりと微笑んで見せて、けれど他人行儀に作り笑顔で笑った。

「約束だよ」

一言、先輩の出した言葉には聞き覚えがある。

寮内は何処もかしこも混雑し、それぞれが己の周囲しか把握できない混乱状態で自室に帰っていく。今、誰もが注目しているだろうと推測できる唯に誰にも見咎められずに話しかけられたのはこんな状況だからこそだった。

「ええ、もちろん。制裁ですね。——明日でいいですか？今日は都合が悪いんですけど」

「君の都合は聞いてない」

有無を言わさない断言は唯とその人物の関係性を表している。

常に優位にあるべきはその人なのだ。親衛隊の総統括——かなえ鼎ま真
木。最上学年の先輩だった。

「けれど、関係はあるでしょう?」

駆け引きというのは本来ならば対等でいて行われるものだ。けれど、唯はそれをする。

「いいだろう。引き伸ばされて都合が悪いのは君も同じ。明日の昼、いいね」

「拒否権のないことでしょう。約束、ですしね」

鼎との間に交わされた約束。それは彼の立場からすれば当然の行いと彼の利益に関するものだった。唯は彼の利益になる。だからこそ、ある程度の秩序を彼によって統制される。

この学園生活における唯の生命線ともいえるのだが、その自覚は果たして両者ともに何処まで感じているのか。

「明日の昼——それまで、厄介だな」

彼の統制が始まるのは彼の“制裁”を受けた後からだ。

それまでの間は唯が自分で周囲に対応しなければならぬ。それは酷く退屈で厄介で面倒くさいものになりそうな予感だった。

類は友を呼び 美形は迂遠しない（前書き）

生徒会登場です。

そして匂わせる、次なる人物。……ここまで引っぱってきましたが、後二三話で登場してくれます。

類は友を呼び 美形は迂遠しない

【No.2】

「おい、後ろ……」

それは朝、ショートホームルームの始まる直前のことだった。短い休みが終わるということに騒然とした空気は収束よりも時間を惜しむかのように騒がしく、それに最初に気付いたのが誰だったのかはわからなかった。

ただ、唯はそれほど早く気づいたわけではない。異常なほど静かになった空気に何かがあったと考えない方がおかしいだろう。ただ、その例外として話に夢中になる、もしくは話の方が大事だった場合にのみ、それを知っていてなお無視するという選択肢が存在する。

そして犀臥はその選択肢を取った、それだけだ。唯にとっては余り歓迎できるものではなかった、というだけで。

「誰だ？」

コツ、コツ、と淀みなく響く靴音はそこで止まった。

蒼白をみせる唯の顔、硬直する空、口元を押さえた蒼の三人を真正面に見て犀臥は己の背後に振り返らず、呟いた。

「生徒会だよ」

答えは闖入者によって示される。寸前まで行っていたトランプゲーム大富豪の手札を置き、振り返る。皆に硬直をもたらす人物、いや人物たちは——そう、美形だった。

誰からも人気を集めるような華やかな雰囲気を持つ美形の集団。

……生徒投票に選ばれた、美形の中の美形。そのうちの一人、人当たり良い柔らかな笑顔を浮かせ犀臥に話しかける。

「はじめまして。生徒会として君に話があるんだ、生徒会室まで着てもらえるかな」

静かに微笑み佇む姿は天使の微笑。けれど、それが純粹なものと

は思えず、警戒心が犀臥の中に生れる。周囲に与える己の影響力を知り尽くし、計算に満ちた行動を取っている姿だ。

「来い」

中でもひととき高圧的な鋭い視線を犀臥に送る男が言った。それは人より高みにいて、決して届かない統率者——人を従わせる声でもあった。しかし、

「命令される覚えがないな」

犀臥もまた、人の上に立つ存在だ。故に、逆らえる。それに、

（“あの人”に比べれば、何と言うこともない）

昨夜に会った人物のことを思い浮かべ、自然と顔が引き締まった。経験と立場による威圧感ではない。それは本質からして、他の者とは格が違う。犀臥の目の前にいる高圧的な物言いをする男が努力と才能によって現在の地位を守るならば、あの存在は天性のものによる、何の力も加える必要がないほどの素質。ただいるだけで空気が変わる。ただ、その名だけで人を従わせる。……その二人は王国と帝国の違いのように圧倒的な差だった。

「犀臥？」

小さく、隣から声が聞こえて。握られる制服の裾に、その体を捉えた。

犀臥は体に入った余分な力が微かな震えへと変わりそうだったのを堪え、冷静に目の前の人物だけを見た。抱き寄せた唯のことにすることもなく、目の前の男へと眼を向ける。

「俺は今、こいつといるんだ。邪魔するなよ」

しかし、

「……そっか、そういえば世話係だったけ。“唯くん”も来てね」

男は応えることはなく、こちらの言葉も聞こえないようにただ背を翻した。代わりに、柔和な笑顔ながら眼鏡の奥がそれほど笑っていない人物が、言葉を付け足した。

唯が蒼白な顔を横に振り、拒絶の意志を示していたことを酌んでくれる者はそこには一人もいなかった。

「お茶でも飲みながら話そう」

さ、座って。と促す栞に唯は居心地の悪さを早速感じていた。

生徒会室。それは唯には縁のない場所だった。少なくとも、今までは決して来たことのない、けれど生徒たちの憧れの場所だった。

……唯にとつては絶対に近寄らないと心に固く決めていた場所でもあったのだけれど。

「刃切、紅茶入れてくれるかな」

「何個ー？」

「ここにいる全員に、新しいのを」

半ばムリヤリ教室から連れ出され、授業も休むことを余儀なくされた唯は犀臥の隣、極近密な位置に座を取り、落ち着くこともできずにそのやり取りを見ていた。

部屋の間取りは中央に机・客席、その正面に会長席、その横に補佐の席が小さく、両脇に縦に並ぶように副会長席と会計・書記席がある。しかし、現在埋まっているのは左右の書記・会計席と片方の副会長席・会長席のみ。後の二つは現生徒会にはいないメンバーだ。「まず、自己紹介しようか。俺は法宵 栞。ほっしょう しおり副会長をしています」よろしく、とにこやかに笑ってみせる栞の背景に浮かんでいそうな華はユリ。薫り高く、品位に溢れている。

「こっちの偉そうなのは城ヶ崎 乱、じょうがさき生徒会長」

「俺は会計の文月 刃切です！」「ふみつき はきり

「同じく弟の律月です！書記です」りつつき

「よろしく！」

「うん？どうかした、有島くん」

いつの間にか、眉を顰めていたらしく、気遣うような言葉を栞に掛けられたが唯は頭を振った。実際には逐一こちらの反応を窺うような視線で見えていた栞からの追及をかわす。

「いえ、別に……俺、帰っていいですかね」

「ダメだよ」

即座に返された言葉には少しばかりの本心が覗いて見えて、オヤ、と唯は視線を上げた。それに促されるようにして栞は完璧な笑顔で真意のみ覆い隠し、言葉を紡ぐ。

「もつと友好的にいこうよ」

「あ、俺ムリです。無理」

今度は唯の方が却下する。そして己の制服を軽く引っ張って示す。白は生徒会側所属、紺は生徒会側所属の一般生徒。黒は執行部側所属、緑は執行部側所属の一般生徒。――唯の着ているものは黒。そして、犀臥の着ているものもまた、緑だった。

「俺の所属、知ってるでしょう」

「それについては不問だよ、陽汐くんのこともあるしね」

緑と紺に至っては自由意志によって移動が可能なのだ。そもそも、入りたてはそこら辺の区分に属していないので半年後までは自由に制服の着用が可能。つまり、犀臥はたとえ緑を着ていたとしても、宙ぶらりんな状態でしかない。

もつとも、犀臥に至っては学校側の希望として黒に迎える準備がある。半年を待たずして黒、執行部側確定の人間だ。歓迎会が行われれば正式なものとなる。そして、その歓迎会の日取りは、（……昨日、のはずだったんだが）

行われなかった。しかし、正式な通達としてなっているのは確認済み、というか倭にわざわざ“あの人”のところへ連れて行き会わせたのだから、確定しているのだ。お披露目としての歓迎会と、顔合わせが別になった今回が特例ということだ。

（あの人のことだから……）

唯は無意識に身体を震わせた。

「……それだけでなく、俺はあなたたち美形と極力かわりたくないの」

「よく口が回る猿だな」

乱の言葉にいち早く反応したのは言われた唯ではなく、栞。

「乱……？——でも、君の周りには例外が多いみたいだけど？」

はいはい、と適当に返事を返して再びこちらへ背を向ける会長から栞へと視線を移した。

宇治倭を筆頭に、唯のまわりには美形が多い。しかし、それは唯の意向によるものではない。単に集まってきたしまったというだけだ。否定は出来ないが肯定することもしない。

「今以上に目をつけられるのが嫌だって言ってるんです」

恐怖は無意識の震えで襲う（前書き）

双子の内緒話は次の機会に書かせてもらいます。

恐怖は無意識の震えで襲う

否定の言葉に空気が壊される前。

「栞。のんびり話してねえで話進めろよ」

「お前が進めろよ」

またしても挟まれる乱からの言葉に、今度はまともなことを言ったのだが、栞が位置にもなく、顔を向けることもなく否定する。よくあることなのか、にこやかに、けれど黒々しい声音の言葉だった。これでは腹黒以外の評価をつけることは出来ない。

「……なんてね。乱ってば、自分の役割を押しつけたくせに文句言うなんて、だからキャラが被るんだよ。偽物くさいしね」

「るせえ……っ！」

「あーごめんね？昨夜からこんな調子で。とある人と名前の感じが似てる上に傲岸不遜の王様キャラも被ってるし、更に言えば乱の方が後からの二セモノ、小者くさいからって拗ねちゃってさ……」

「てめ……っ！ケンカ売ってんのかよっ！」

「売ってるのはそっちでしょ。何、その態度。子供みたい」

やたら毒舌な会話を殆ど一方的に終わらした栞は一変して柔らかな声音で二人の客人に向き直る。話題は本筋、本題だ。

「ごめんね、話が随分逸れちゃったようだ。それで、今日呼び出したのは僕らを知ってもらう為と、——“裏”のことについて」

ビクン、と身体が不自然に反応する。

こんなところで聞くはずのなかった言葉。いや、そうじゃない。

“唯”と“裏”の関連性を、気付かせてしまう言葉。——犀臥は、唯が裏の人間だということを知らない。

（——気付かされる。自分がどこまでも弱い人間だと、こんな時、思い知らされる）

「実は昨日の寮生歓迎会の時、君たちの所属寮でちょっとした事件があつてね。その当事者である君ら二人に事情を聴きたい」

「能力は発現しませんでしたよ、犀臥が制御しました」

栞の言葉を遮るようなタイミングでそんな言葉を発したのは唯だった。暗い表情に感情の消えたような平坦な声音。そのことに犀臥はその端正な顔を曇らせ、訝しむ。その瞳は唯にのみ向けられている。

「……唯？」

乱には理解できない。犀臥を呼び込むために仕方なく連れてきた、オマケである有島^{ありしま}唯^{ゆい}。しかし気付けばオマケのはずのそいつに話題は浚われて行く。何故か。生徒会副会長として進行役を努める栞がやたら唯を気にしているから、ということに限る。

（今度は何だつて言うんだ……イラつく）

場の空気が暗くなり、乱はまた話が逸れるかと思つたが今度は栞がそのことに何かを言うことはなかった。

「……だから痕跡がなかった、何も起こらなかった。確かにそうだね、けれど編入したてで力の制御もいまいち信用ならないというのも確かだね」

「そのための俺です」

やはり、先ほどまでとは空気を異にした唯が言う。まるで犀臥に発言させないかのような――（何か、隠してる？何かって何だ）

乱は眉を潜める。しかし、不快な表情を見せることも嫌で窓の外へ視線を逸らした。

（そもそも何故俺はこんな奴に頭を巡らせてる？）

窓の外、雲へと視線を巡らせることは普段の乱から言えばありえない行為だ。その行動を怠けることと同義だと思う。だからそんな行動を乱がするわけにはいかなかった。いつでも完璧で、そのためには努力を惜しまない。……けれど、そんな思いを押しつけてまでその場から視線を外していたかった。――そのことに、乱は気付かない。

「それで――」

「あの」

差し挟む唯の声は、強くなく、けれど不自然なタイミングのそれに室内の全員の視線が集まる。そんな中、

「……気分悪いんで、先、外させてもらいます……犀臥はいて、いいから」

「でも――」

「有島くん。一つ、伝言があります」

体調の悪さは見て取れた。顔色が悪い。（先ほどまでは平然としていたのに）――急激なこの変化は、“裏”へと話しが移行してからのものだった。そのことに犀臥が気付く前に、栞は唯の退室を許可する声の代わりの言葉を発した。

「――ッ」

息を飲む音が、響いた気がした。

けれど、栞は先を続けた。その意味は分からないままに、紡ぐ。

「『放課後、いつものように』」

一瞬、表情が抜け落ちた。……ように見えた。

見間違いかと思うほどに、ほんの瞬きの間さえも長く感じるかのような短い時間。それは表情と表情の間で作り直す時間ではなく、全く“無”の表情だった。顔自体が認識できなかったかのように、まるで何もなくなった。

「……わかり、ました」

暗い、瞳、テンポの遅い声。

明るい髪の色さえも色褪せたような、そんな空気を纏って、唯は了承した。

「気をつけて。お怒りだったから」

真意は知らない。伝言を残した人物と唯の関りを、ここにいる者の中で知る者はいない。

だから残された伝言の意味も、示された内容もわからない。それが唯にどんな影響を与えるものかさえ、知らない。――“裏”で起こった事は生徒会でさえも把握できない。

ただ、唯の過剰とも思えるような反応から推察した事柄に対して、ほんの少しの同情と注意を促すぐらいしか栞にはできなかった。

「ええ、わかってます。……失礼しました」

「あ、あともう一つ！うちの生徒会に入りませんか？」

ドアを潜ろうとした唯の包まった背に対し、さほど慌てた風もなく「俺の個人判断だけだ」と言って栞はいつも通りの笑顔を見せた。しかし、対する唯はやはり、暗い。――いや、震えていた。目を凝らさなければわからないほど細かに、小さく。

「……初対面から嘘つく人と仲良くしようと思う人、いないと思いますけど」

「俺たちの事、わかってた、な」

「うん、……そうだな」

小さく、交わされる双子の会話を耳にしながらすっかり冷めてしまった紅茶を傾ける。

黒い影が飛び出るように後を追うのを、栞は見ないふりをした。

恐怖の根源

「唯。あの人って、誰だ」

その言葉に、無意識のうちに唯の体は震えていた。——唯にとって、“唯”にとっては、恐ろしい。畏怖の象徴とか、そういう問題じゃなく、根本的に（——暴かれる）

不安感に、直面する。直面させられる。視線を逸らすことさえ許されない存在に、唯は怖れる。

精鋭さがなかった。どちらかといえば、動揺していた。それを表に出さないようにしながらもそれは重苦しさを拭えずに纏っていた。身を重くするような沈黙が通り過ぎる。

怯えたのはかの人物にか、それともその先にいる目前の者か。どちらも大差ない結果だった。

「——お前も会っただろう」

己の人格さえも砕いてしまいそうな、そんな空間に木霊する、一欠けらの鍵。

「我^が黄^{おう}地^じ 狼^{ろう}。この学園の王者さ」

思った以上に小さくなった声は、辛うじて名を紡いだ。

（ああ、これで——本当に、おしまいだ。ピースが揃う）

絶望が早いのか、歓喜が先か。紙一重の感情は同じ人からもたらされるに違いない。

すべてがバレルのはいつだろうか、己の嘘に自嘲した。

「君が有島唯？」

可愛らしい声音の、けれど剣呑な声音に唯は顔を上げた。

休み時間の今は生徒たちが自由に校舎を行き来する時間だ、教室の前後にあるスライドドアから廊下の景色が見える。唯の前に立つ

人物と同じような、背が低くて可愛らしい生徒たちが、群を作っている。目の前の人物を唯は知っていた。生徒たちの間でも有名な、——人気のある生徒だ。そして美形崇拜者であることも共に広く知られている。己の周囲にも容姿・家柄・能力と三拍子整った人物しか近寄らせないという徹底振りである。

そんな先輩が唯の目前にいるからには、その用件は知れている。「場所、移動しましょうか？」

先輩だということが分かっていいるからこそ、唯はそう声をかけた。教室にはいつも唯が話す友人たちは出払ってしまっていて、犀臥はまだ生徒会室から戻らない。皆がいない機会を見計らって話しかけられたと見ていい。この場面を見られて都合が悪いのは唯だけのことではないのだ。けれど、そう長いものでもない時間帯の中で、揉め事が収束するまでの間に帰ってこないとは言いい切れないのに場所の移動を提案する唯を無視して、勝手に話を進める。

「平凡だね。聞いたところによると成績がいいわけでもない、凡才。あの方々の傍には相応しくない、害虫だ」

唯は言葉を聞き流しながら教室を伺った。

クラスメイトたちはあくまでも自分たちの時間を過ごすようで、まるで何事もないかのように振舞う。まだ犀臥たちは来ていない。帰ってくれば直ぐにでも分かるだろう、教室の外、廊下側が騒がしくなるだろうから。——けれど早く片付けた方がいい。

高校生男子の平均身長を大きく下回る、ともすれば中学生と間違われるような幼い体型と低身長の先輩。少女の可憐さを持つ顔立ちを自席で見あげる。

「彼らが優しいからって図に乗るなよ。迷惑がられていることにも気づかない愚鈍。付きまとって、ストーカー犯罪でも起こす気？——そんなことになる前に僕らが阻止するけれどね」

「要約すれば自分たちが崇拜する方々に軽々しく近寄るなっということです。時間は限られてるんですから有効に使いましょうよ。こんなことにかかずらわっている暇があるなら“あの方がた”の傍に

行ってくればいいじゃないですか。いいんですか、気づかれても。優しいって行ってるその人たちに気づかれて、困るのはそちらですよ」

静かに、声も荒げずに反論すれば案の定、逆上してくる。短気の上ないが、それも唯には想定内のことだ。そもそも、精神的に成長していればこのような、人に注目を集めて醜態を晒す愚を犯すこともない。――責めているはずの自分が、逆に怒らされているという状況を彼が正確に認識しているかどうかは定かではないが、少なくとも、素直に領かない後輩に対して歯痒い思いは感じているだろう。それはまるで子供のようにだ。

「言っておきますと、俺は自分から切り捨てるつもりも離れるつもりもありません。あなたに口出しされる覚えもありませんよ。あなたは俺に関わりのない人だ」

「僕は陽汐様の新鋭隊長だ！関係なくないっ！」

感情任せ。理屈も常識も、何もかもが見えなくて、自分のことばかり、都合の悪いことにはふたをする。それは無邪気で、しかし無意識の悪意だ。……いつまでも子供でいて許されるわけではないのに。この人は、それまでの人生でそうとう幸せだったのだろう。子供でいても許される、守ってくれる人のいる環境だったのだ。

そう思うと自然、声音が冷たくなるのを感じた。たぶん瞳はもつと冷めてる。

「犀臥が黙認してるわけでもない、名前も知られていないような人物に口出しされる覚えはない。――崇拜して距離とって？近づきたい人相手に自分から離れて、馬鹿じゃないですか」

パンッ――

甲高い音がすぐそばで鳴る。頬に鋭い痛みが走った。

唯は揺れた視線を元に戻して、己よりも小さいその人をまっすぐ見つめた。

青褪め、己の手を見て、その行動を後悔するような人物に笑いが込み上げてきそうだった。脆弱な精神――口車に乗せられて自覚し

ないまま感情を行動に表す。そんな人物が今までどれほどの人を破壊へと押しやってきたのだろう。

直接手を下すことがないからその痛みが分からない。己の行動による責任を知らない。その重さを自覚しない。

「殴つて、冷静になれましたか？ 気が晴れましたか？——そうじゃないでしょう。感情に身を任せればいいって言うものじゃない。それは抑えるものです」

言い返さずに行動で対応するのは凶星と取られて仕方ない。口出しする権利さえない者相手に一々説明する手間が面倒で話すのはこれつきりにしよう、ともう少しだけ口を開く。

「意味ないですよ。あなたがどうしたところで俺は変わりません。変えるつもりありませんから」

再び怒りに顔を赤くしながらその人は手を上げる。スツと上げた手は先ほどのように唯に向けられたものではない。背後に付き従うかのようにいた生徒たちが数人、一歩前へ出た。

彼の合図にその両手に持ったものを掲げ、そして唯の真上にぶちまける。

「お前なんか陽汐様の名を軽々しく口にするなッ！ 汚らしい鼠め！」

床を汚すことも厭わずに決起したことには素直に驚嘆を覚えた。

しかし、根本から間違っていることに何故気付かないのか、唯には理解できない。

（鼠に水をかけて濡れ鼠？ 馬鹿馬鹿しいにも程がある）

バシャ——と音を立てて幾つものバケツから流れ出た水は狙い違わずに唯に降り注ぎ、濡らした。クラス内の生徒たちが息を飲んだような、そんな気はしたがもう既にそんなところへ気を回してはいない。

「もう一度だけ言います。——それで満足ですか」
「っ」

唯は先輩が来てから初めて自ら行動を起こし、立ち上がった。
濡れた制服が体に張り付く。髪から滴が垂れる。けれど気にすることなく、唯はその人物だけを見据えた。

微笑みはただ一人だけのもの

「何してるの」

その人物の気配に気付かなかったのは失態だった。

バツと振り返り確認しても声から察せられた姿が変わるわけでもなかった。こんな状況、こんな時に会うには一番厄介で、遠慮しなかった人物——漆黒の髪に漆黒の瞳を持つ美形。

犀臥ならどんなに良かったことか。それは全く別の人物だった。

「て、天上の方々に近づくこいつにせい——」

「君に発言を許した覚えはない」

言うが早いのか、小柄な体を持ち上げる。首に添えた手には力が入っているようには見えないのに、実際には締め付けている。

「あぐつ……うあ……」

爪先が届かず、空を切る。口が空気を求めて魚のように開閉を繰り返すのが視認できた。手は首元にやり自由にならない息に足掻く。唯は黒の腕へと手をかけた。

「その辺にしてください、狼」

止まるとは思えない静止をかければ意外にもその視線は唯に降り注ぎ、同時に自らの手に掴んだものへの興味は薄れた。

唯に掴まれたままの腕を動かすと、体重を感じさせないままに横に大きく動き、その手の中のもの——小柄な先輩を突き放した。その円弧に描く先は教室を越え、開いたままの廊下へと通じるドア、その先の外へと通じる窓ガラスだった。勢いでいけばガラスを突き破りかねないというのに偶然か意図的か、これだけの人がいるにも拘らずその一直線の間には障害となり勢いを殺すような人が一人もいない。

唯は横に吹っ飛んだ体に追隨する。そして自らその先に体を投げ出し、意識の薄れた体を抱きとめて衝撃を殺した。

「——ッ」

小さく息が詰まる。

けれど、最悪は回避した。

性格がどうであれ、それを型作る環境が腐敗の原因だ。それはこの閉鎖的な学校の中では加速され、歪みは広がる。

だから唯は己に対する暴言など、意に介さない。自分の立場ならば批難は当然とも思えるし、それでなくとも評価が正しい判断のもとで行われたものでないことも知っているからだ。だから文句は言わない。つい先ほど己に暴拳を働いたこの小柄な先輩に対してもなんら思うところがない。嫌いだというような思いを抱かない代わりに、傷付いても勝手にしているという無関心だ。少なくとも、自分にかかわりがない限りは。

「あ……ああ……あ——」

「大丈夫ですか？」

息の乱れたままの背に手を添えて呼吸を促し混乱を極める腕の中の人物を見やった。

状況が理解できないのは誰にとっても同じだが、被害にあったのならばそれもなお一層深い。

たった一言——それだけで首を絞められ、殺されそうになったのだ。

息を取り込むことだけで精一杯で周囲の状況も自分の状況も何も分からず、ただ目の前の壁となる服へと手を必死に伸ばし、縋りつく。それが数分前まで己が批難を繰り返した人物だということもわからずに。それを、唯は哀れと思った。

「離せっ」

声をかければすぐさま拒絶されてしまったがそこまで言えるのならもう大丈夫だろう、と力の入らない腕でされた拒絶にこちらから距離を取る。

「何で君が止めたの」

唯が立ち上がったところで引つさらうかのように教室、いや正確には教室前の廊下から連れてきた狼はそう、質問した。

「何でも何も、俺は何もされてませんし」

それどころか自分のせいで被害に合わせたようなものだ。狼の行動はたとえあの先輩の失態であってももとの原因が唯に当たる。だからその身体が目の前で傷付くのが嫌になっただけだ。気分の悪くなるようなそれを回避するために多少、派手に行動してしまったことに後悔したが。

「濡れてるよね。水でもぶっ掛けられた？」

「ええ、局地的雨で。天にぶちかまされました。神様に嫌われてますからね、俺は」

「それよりも、狼は俺に用があつてきたんじゃないんですか」

「じゃあ、そういうことにしておいてあげるよ」

俺にとつても都合がいいしね、という狼の言葉に首を傾げる。

「ちょうど良かったよ。犀臥の歓迎会するからね」

「また、俺ですか。そもそも放課後じゃなかったんですか」

「何か文句ある？」

「ありませんよ。あつたとしても言わせないでしょ、あなたは」

「狼。それと、何か言う事ない？」

留学から帰ってきて、一度も会っていない。もつとも、帰国が今

日だったのだけれど。

こんな形で、けれど

「……おかえりなさい、狼」

「ただいま、唯」

狼はそう言っ　て綺麗な微笑みを唯に見せた。

微笑みはただ一人だけのもの（後書き）

やっと出てきてくれました、我黄地 狼。

これで登場人物が（殆ど）出揃いましたので、近々紹介ページをアップさせていただきます。

傷付くのは誰のためか 孤独ゆえに（前書き）

戦闘シーン、突入です！次回も引き続き、バトル。

傷付くのは誰のためか 孤独ゆえに

「犀臥、行くよ」

また、このパターンか。行く先も示さずに、有無も言わず向かう。

違うのは深がついて来ることだけ。

「本当なら動きやすい格好に着替えた方がいいんだけどね。今日ぐらいいいかな」

問いかけの形をとつてもそれは内示のみで誰からの答えも期待していない。そもそも、犀臥はそれに関する答えを持たなかった。黙って進む。

それが自然と緊張感を孕んだものになったのは、あの存在のため。

（——唯）

連れて行かれた。犀臥はそれを見ているしか出来なかった。割り込むことなど、できるはずもない。

つい昨日のことだ。あの存在に恐怖した記憶は新しい。

犀臥たちが来たのと時を同じくして戦いは始まった。

最初は緩やかに、徐々に厳しいものとなっていく動き。唯は追いつけない。

二が四になつて四が八になる。八が十六になつて十六が三十二に変わる。それは拳打の数だ。武器も能力も使わない、ただの体術。しかし同じ条件の唯は対応しきれずに攻撃を受ける。受けきれずにまともに喰らう。そしてダメージが蓄積されるほど、動けなくなっていく唯に狼刃更に加速する。そこには遠慮も配慮もなく、容赦もない。

この状況だけを見ても実力差は歴然としている。防戦一方の唯、余裕のある狼。

しかし、狼に侮りはない。手を緩めることもなく、最後まで冷徹に攻撃する。

「中には入れない。いや、入らせないよ」

倭が珍しく真剣な様子で言うが、犀臥には何がか分らない。自らが場内へ入ろうと動いたことも認識していなかった。混乱する頭は腫だけを大きく見開く。

なぜ唯がボロボロなのか。なぜ倭たちはこの状況で平然としているのか。

（——ただの暴力だ）

繰り返し広げられているものが、戦いにはどうしても思えない。

「黙って、見てろってことか——」

低く、唸るように犀臥は声を出した。

「あれは邪魔しちやいけない」

その言葉にあるのは犀臥が標的になるということよりも、唯を氣遣うての言葉だった。

しかし、犀臥には理解できない。

己がただ、何も出来ないことが、酷く、——苛つく。

「犀臥。行ったところで、きみになにができるの？」

（そうだ、何も出来ない）

そうしたところで、意味はない。それでも、何もしないわけにはいかなかった。

感情が恐怖を乗り越え、飲み込まれ、——波に似たものがどんどんと大きくなっていく。

「眼に、焼き付けて。唯はああして、あの人に逆らい続けているんだ」

（違う、逆らっているわけじゃない。期待に、答えてるんだ）

瞬間的に深の言葉を否定した。けれど瞳は逸らさず、口を動かすことももどかしく、魅入るだけの犀臥の思いは誰にも届かない。

唯は立ち上がったては傷を増やし、ボロボロになっていく。愚直な健気さだ。

しかしそれは頑なな素直さであって、負けん気ではない。ただ要求に応えているのだ、全力で。倒れ伏すことを許さない瞳に強制されている。

他の誰でもない、唯だけは、あの人に対等にあれと訴えられているのだ。

「自分が傷つくことを恐れず、避難を浴びても唯は、立ち続ける」
唯の体が吹っ飛ぶ。犀臥は叫んでいた。

「唯!!」

地面に擦れて勢いが殺がれた。

休むことなく続けられる攻撃だが唯にとってはその一つ一つが重く、また素早かった。防御に徹しても追いつかない速度は武器など使わずとも肌を、服を切り裂く。

出血からくる眩暈と衝撃に揺さぶられる体。その両方に耐えつつ唯はひたすら腕を上げ続けた。それでも、攻撃は喰らう。腹にめり込む足に体が吹っ飛ばされる。

——隙だ。

しかし狼は踏み込まない。唯を痛めつける目的ではなく、戦いを所望するがために追撃はしない。大きな隙には手を出さない。それで壊れてしまつては困るからだ。

地面に転がったまま、考える。

負けてばかり、勝敗の決まった戦いに何を期待しているのだろうか。狼は唯に向ける思いが重過ぎる。ただのおちこぼれに、狂気にも似た思いを描いているのだ。

唯は狼が、人が思うほど何かができるわけではない。

「いいの？来ちゃうよ」

狼の声は大きくも小さくもなかった。唯には聞こえる範囲で、けれど場外の声援の中では掻き消えるような音。けれど、唯は弾かれたように身を起こし、叫んだ。

「来るな!!」

狼の視線が犀臥へと、向けられていた。

（無理だ。今の犀臥では狼を満足させるどころか失望させる）

失望にはそれだけの代価を――犀臥を二度と使えなくする。まだ開いてもいない可能性の花を摘み取り、踏み躪る。……狼ならば、やるだろう。それも、唯に対する挑発の為だけに。

「へえ……そんなに大切？」

狼の声にゾツとする。

それだけで狼の次の行動がわかった。起こした身を立て、それを阻害するために、再び己へと興味を移すために動く。けれど、それまでに追ったダメージは思うより大きかった。

何かを成す以前に、狼に攻撃を浴びる。

腹部、鳩尾に膝が入り込んだ。

「ごほ……っ」

そのまま、前のめりになる体に追い討ちとして頭をボールのように横から蹴られる。顔を上げることさえ出来ない短い間だった。

「来なよ。入っておいで、相手してあげるよ」

狼は唯から視線を外し、犀臥を場内に誘った。その顔は、笑っている。樂しげに口端を上げ、表情を歪ませる。しかしそれはどこまでも狂気に満ち溢れた、戦いへの喜び。獲物を狙う猛禽類よりも獰猛で鋭い瞳で晒う。

揺さぶられた頭はまともに立ち上がることもさえ出来ない。けれど、
（――止めなければ）

残酷に冷たさを宿す瞳をまともに受けた犀臥は蒼白なまま、眼を逸らすこともできずにただ肯定だけを求められていた。魔に魅入られるように、命令に従って動くその瞬間。

「狼――！」

狼の、犀臥へと向けた体。基盤である足にしがみ付いた。

「邪魔だよ」

言葉とともに足から振り払う攻撃を、頭に加え続ける狼。唯は耐えた。それが長い間か短かったのか、分からない。しかし（逃げる。

入ってくるな。逃げろ）心の中で唯は繰り返し叫ぶ。

いつの間にか、手は離れていた。前に行く黒い影を見る。

口の端が切れ、鉄錆びの味が口の中に充満する。けれど霞む視界さえ、気にすることはない。

（なりふり構ってられるほど、余裕なんて、最初からなかったんだ）
「——させない——！」

唯は疾走した。

狼と犀臥の距離、時間。そして唯が狼に追いつくのに必要な時間と速度。瞬間的に計算をはじめ出したのは思考ではなく体だった。己の枷としてつけていたストッパーを外す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2557r/>

浮き夢のまどろみ

2011年4月17日11時40分発行